

---

**I S インフィニット・ストラatos 織斑 一夏と千冬の兄**

アルトアイゼン・リーゼ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 織斑 一夏と千冬の兄

### 【NZコード】

NZ532X

### 【作者名】

アルトアイゼン・リーゼ

### 【あらすじ】

織斑 一夏は織斑 千冬に家族縁を切られ兄の所に住んでいた  
だが平和に暮らしているそんな時に一人は大勢の目の前で  
IS起動させてしまう

大学を卒業しているのも関わらず再び高校に通う事に！  
だが一人は専用機を持っていた  
IS学園でどんな嵐が起こるのか！？

## 始まり

ピピピピピバシ！ボシュン！

目覚ましのやかましい音を叩き消して俺は起きた

コキツゴキゴキツ

今のは手と首の骨を鳴らした音

朝起きたらまずこれをする

俺はベットから降り洗面所に向かう

顔を洗い髪を寝癖を直しキッチンに向かい和食風の朝食を作る

テーブルに作つたご飯を並べコップと箸を並べた

ここまで作業が終つたのにまだ起きてこない

俺は一階に上がりある部屋に入るそこにはベットで幸せそうな顔で眠っている弟がいた

今は弟と二人暮らし親はいない

・・・・・・・・隨分と昔の事だ

両親に捨てられて弟は妹と暮らし

俺はそんな二人を助けるために高校に通いながらバイトをしていた

俺は高校に通うために外国にいた

だがそんなある日、日本で妹と暮らしていた弟が顔に傷を作り体中に痣や怪我をした状態で俺の元に知り合いである叔父さんと一緒に来た

理由を聞くと弟はかなり勉強が出来それで虐められ相手を殴つてもいいのに殴られたと

先生に言いつけられ妹に散々怒られ自分が正しいことを言つていても拘らず殴つてきて

拳句の果てに

「お前は私の弟でも家族でもない！」

と言われたらしい

そのため弟はちょうど俺のいる国に行く用が会つた叔父さんに頼み込み

連れて来て貰つたらしい

弟は俺と一緒に居たい　あの家には戻りたくない！  
つと言つて來たので一緒に暮らしている

それが何年も前の事だ

弟の希望もあり苗字も俺の同じ　希望にした  
俺は親戚に引き取られこの姓になつた

その親戚も俺が引き取られて直ぐに死んだがな  
名前は一夏のままにした

理由は俺がその名前がいい名前だと昔に言つたからだ  
さていい加減に起こすか

「起きろ、一夏」

「わにゅ？あれ？アクセル？」

「誰が地球連邦軍特別任務実行部隊特殊処理班の隊長だ」

「ごめん・・・お兄ちゃん・・・寝ぼけてた・・・」

「かまわんホラ顔洗つて来い朝ごはんにするぞ」

「解つたよベー オウルフ」

「誰が地球連邦軍特殊鎮圧部隊ベー オウルブズ隊長だ」

「だつてお兄ちゃんの名前恭介じやん？」

「phinskeと一緒にするな」

そんな悪ふざけも混ぜながら一夏は洗面所に行つた

俺はリビングでご飯を盛る

ご飯は温かいほうが良いからな

ほどなくして普段着に着替えた一夏が着た

「では今日も」

「「この世の全ての食材に感謝をこめています」」

どつかで聞いた事があるかもしれんが気にしないでくれ  
いつもどうりの朝

味噌汁を吸い焼き魚を食べ、飯を食べる

うむ・・・卵焼きは美味しくできたな

・・・・・

「「」馳走様でした」「

食べ終わつたら食器を片付け洗い拭き食器棚に入れる

「一夏、いよいよだ」

「うん・・・でもこめん俺がIISなんかに触つたせいでお兄ちゃんに  
また高校に行かせることになつて・・・・・」

「気にするな、だけど問題は・・・」

「「織斑 千冬」」

かつて妹であつた人物

一夏を拒絶し家族縁を切つた女

そいつがいるIIS学園で教師をやつている

それが問題だ

俺達の容姿はかなり変わつてはいるがな

一夏は背が高く髪も白銀となり織斑 一夏には全く見えない

俺も長かつた髪を切りショートヘアにして今まで家族の前でも  
していた

カラーコンタクトを外し本来の目の色 青と緑のオッドアイに戻した  
千冬が知つてゐる俺達と今の俺達はかけ離れてゐる

「さあて行くか？」

「うん」

「ヴァイス持つたか？」

「うん持つたよお兄ちゃんは？」

「俺がアルト忘れると思つか？」

「嫌ないね

「だろ？」

俺達は家を出てエリ学園に向かつた

何これ？予想してけどパンダじゃないぞ？

「ではSHRを始めますそれでは皆さん1年間宜しくお願ひします  
「「「・・・」」

山田先生が挨拶をするが皆無視

「えへっと・・・では自己紹介をお願いします・・・」

なんか・・・涙田になつてゐる・・・

「ではお次は・・・希望　一夏君お願ひします

「はい希望　一夏です　趣味は読書と音楽鑑賞です

「「「キ・・・」」

「き?」

「「「「キヤアアアアアアアア～！～！」」」

!/?びっくりしたあ・・・

「男！美形！-」

「優しい感じ！-！-！」

「私どつきあつてえ～！」

一夏人気だな

次は俺か

「希望　恭介だ　大学を卒業したんだがISHに触つたためにまた高校からやり直す事になった

皆より年上だが気軽にかけてもらえると助かる　趣味は料理にお

菓子作りに読書に機械弄りだ

「きやあ～！！！年上！！」

「ああ！地球に生まれてよかつた！」

「クール系！カッコいい！！」

「お兄様！！」

この後千冬の一喝で静まりSHRは終つた  
だが一夏は落ちつかないようだ

「落ち着かない・・・」

「まあパンダ状態だな俺達」

廊下にも大量に女子がいる

「はあ・・・お兄ちゃん」

「なんだ？」

「鎮圧してきてよ狼さん」

「誰が地球連邦軍特殊鎮圧部隊ベーオウルブズ隊長だつてかこれ朝  
も言つたぞ」

## 一人のHS

俺と一夏は授業を受け休み時間にこれからについての事を話していた  
一番の問題は織斑 千冬  
見た目からばれる心配はない  
だが一夏の幼馴染もいる  
ばれない様にしなければならない

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「なんだ？」

髪がロールヘアの女の子が話しかけてきた

「まあ！なんですの！そのお返事は？  
わたくしに話しかけられるだけでも光栄なですから、それ相応の  
態度というものがあるのでないかしら？」

「確か・・・イギリスの代表候補生セシリ亞・オルコット」  
「あらそちらの方は知っているのですね？」

「ああだが邪魔だ今は一夏とHSについて話をしているんだ」

「HSのことわからぬことがあれば、まあ教えて差し上げても  
よろしくてよ？」

私は入試で唯一教官を倒したのですから」

「入試つてHSつけて戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「それなら俺も倒したぞ？」

「え？」

「俺もだ」

「勝ったのは私だけと聞きましたが？」  
「女の中だらう」

その後チャイムが鳴りセリシアは去っていった  
その後何故か勝負する事になります一夏が戦う事になつた

すでにセリシアはアリー<sup>ナ</sup>にいる

「遊んでくるよ」

「ほどほどにな」

一夏はかけていたペンドントを展開し  
長い銃、悪魔のような翼を持つた  
所々に赤い宝石のような物が付いた全身装甲のT<sub>S</sub>  
フルスキン  
そして俺が作り上げ一夏の相棒となつたライン・ヴァイスリッター  
となつた

一夏は敵に向かつていつた

「ではライン・ヴァイスリッター 希望 一夏！行きますー！」

「一夏君…きみの…・HS・・・」

山田先生と千冬がやつてきた

「なにやつてんですか？弟ならもう一つ持つてますよ

「え！？（何！？）」

一人はアリーナのほうを見ると一夏がセシリ亞・オルコットと向かい合つていた

「な、なんだ！あのT<sub>S</sub>は！？」

「全身装甲のIISなんて・・・」

「あれが一夏のIISライン・ヴァイスリッター」

「ライン・ヴァイスリッター・・・純白の騎士・・・」

「（たあてあの代表候補生が一夏の相手になるか見物だな）」

一夏は戦闘を開始的の攻撃を持ち味である圧倒的な機動性で避けていく

「な・・・なんて速さだ・・・」

「ま、まるで分身しているみたい・・・」

「・・・やれやれ遊んでるな一夏の奴」

「「え！？（何？）」」

俺の目には遊んでいるようにしか見えない

「私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい！..！」

・・・ブルー・ティアーズ一夏に襲い掛かるが全くあたらない柔らかな動きで回避していく

「いい加減に攻撃したらどうだ？」

独り言を言つと一夏が攻めに転じた

ハウリング・ランチャードモードで攻撃を始める

だがその攻撃はヴァイスが超高速で動いているためまるで何十機ものヴァイスが射撃を行つてゐるかのように

避けようとするがブルー・ティアーズも破壊されなおも砲撃をやめない

どんどんシールドエネルギーを削っていく

一夏は接近しハウリング・ランチャードモードを直撃させ後ろを取り

「わおわお～ん！！」

と囁つ声と共に三発打ち込みシールドエネルギーを〇にした

試合終了勝者　希望　一夏

一夏はヴァイスをペンドントに戻し俺の元に来た

「イエイ！」

「遊びすぎだ」

パアン！

と言しながらハイタッチに応じる

「次は俺か」

「お兄ちゃん」

「ん？」

「遊び過ぎないよう」

「説得力に欠けるな」

俺は指輪の状態のアルトを展開する  
赤く頭部に角を持ち

肩には大型のコンテナのようなものがあり

左腕には5連式チーンガン

右腕にはリボルティング・バンカー

腰にはライフルと刀

重武装なIS

俺の相棒アルトアイゼン・リーゼだ

「…? また全身装甲…?」

「じゃ行って来る」

「いでら~」

「アルトアイゼン・リーゼ、希望 恭介出る…」

一気にスラスターを吹かす

そこではセリシアが待っていた

「あら逃げたのかと思いましたわ」

「一夏に良い所見せんと兄として示しがつかんからな」

「それにも…・・・二人とも全身装甲…・・・」

「準備はいいか?」

「はいいつでも」

セリシアはスター・ライト mK-IIを放ちアルトに直撃するが  
エネルギーも減ることなく無傷

「なんですよ! ?」

「・・・」

俺は無造作に接近しバンカーを4発打ち込み  
至近距離でチーンガンを撃つた

当然全弾命中あつという間にエネルギー残量0

試合終了勝者 希望 恒介

俺はアルトを待機状態に戻し一夏の元に向かつた

「遊ばなかつたね」

「あれで遊べというほうが無理だ弱すぎむ」

「つていうか先手必勝?」

## 主人公設定

希望 恭介

年齢 23

身長 209cm

体重 89?

容姿 オッドアイのキョウスケ・ナンブ

今作の主人公 一夏と千冬の兄でありより高みを目指すため外国の高校にバイトをしながら通っていた

以前は弟と妹と暮らしていたが親戚に引き取られ希望 恭介となる幼い時からカラー・コンタクトを付けオッドアイという事を家族にも隠していた

ある時顔に傷を作り体中に痣や怪我をした状態で弟である一夏が来て千冬に縁を切られたということを伝えられ一緒に暮らしている

以前から一夏とISを動かせる事ができ自らIS

ライン・ヴァイスリッター アルトアイゼン・リーゼを開発した大学を卒業し一夏の入試に付き添い近くにサンブルとして置いたあつたISに

一夏と共に誤って触つてしまい起動させしまつ

そのため再び高校からやり直す羽目になる

一夏同様に織斑 千冬激しく嫌悪、憎んでいる

だがISの生みの親である篠ノ之 束もある出来事から異常なほど憎しみを抱いている

ペンダントには写真を入れている

希望  
一夏

年齢  
17

身長  
197cm

体重  
75?

今作のもう一人の主人公

元は織斑 千冬と姉弟関係があつたが学校で相手を殴つてもいない  
のに

殴られたと相手が先生にいい付けられ千冬に暴力を振られ家族縁を  
切られ

全治5週間の怪我を負わされ兄である恭介が滞在している国に行く

叔父に頼み

恭介の元に行き一緒に生活を始める  
この時に千冬に縁を切られたため恭介を引き取つた親戚の姓 希望  
に姓を変える

性格は基本的には優しく調子に乗りやすい  
だが千冬に対しては絶対零度の態度で接する

恭介の力になりたいと恭介の開発したIS ライン・ヴァイスリッ  
ターの所有者となる

千冬と束個人の事を途轍もなく憎んでおり憎悪しか感じていない  
束を憎んでいるのは自分が慕っていた姉と言える存在を殺されたから  
ただ個人を憎んでいるので家族などは憎しみの対象外

## 正体がひじめか

俺と一夏は千冬に連れられ俺達の部屋にこもるといつも監禁に近い  
因みに俺と一夏は相部屋です

「さて・・まあの工事は何だ?」

千冬が口を開いた

一夏のヴァイスペンドント　俺のアルトリングを見ながら

「・・・・・」

「答える希望兄弟

「・・・・・どうするお兄ちゃん?」

「・・・・話しても良いけどめんどいな・・・

はあ・・・解った話す」「こつらは俺が設計製作した工事だ」「なー?」

まあ驚くのも当然か

束のどこで工事に関する資料とか見てたからな俺  
まあ「アはいろいろと可笑しいけどな

「自分達の身を守るために作った工事だ

「誰から?」

「俺の弟を「お前は私の弟でも家族でもない!」って言つた妹から  
だ

「!?!?!?!?そ、それは・・・私が・・・い、一夏に・・・

千冬は震えている

「そう・・・此処にいる希望　一夏は織斑　一夏だ　そして俺は織  
斑　恭介・・・」

「！？？！？きよ、恭兄？　一夏？」

「あれ？もう家族じゃなかつたんじやないの？織斑　千冬？」

一夏の目は絶対零度の眼だった

「や、それは・・・あの時は・・・」

「言ひすぎたつて言いたいだつたらいいよ僕が怒つてるのは縁を切  
られて

全身ボロボロにされて全快するのに5週間かかつてお兄ちゃんに余  
計な世話掛けさせひやつたんだから」

まあ病院行つて入院させて時間があつたらにお見舞い行つただけだ  
けどな

「・・・」

「もう僕は貴方と関わりたくないから」

そう言い残して部屋を出て行つた

俺と千冬は向かい合つていた

「・・・なんあんな事を言つた・・・」

俺は口を開いた

「それは・・・一夏が嘘を言い完全に自分の過ちを認めなかつたか  
らです・・・あのくらい言つておけば  
次は大丈夫だと思ったからです・・・」

「・・・本気か？アイツの心のことも考えろ馬鹿者が

アイツは本気で悲しんで精神崩壊を起こさなかつたのが不思議なぐ

らいだつた

お前は相手の事を考えろ そして・・・俺は何処まで行つてもアイツの味方だ」

そう言い残し俺はベットに入った

## 飛行訓練

今は授業中

あの後千冬が出て行き一夏が帰ってきたら  
幼馴染の篠ちゃんを連れてきた  
どうやら彼女は俺達の正体に最初から感ずいていたらしく  
その後一夏が話し完全に昔の関係に戻つたらしく  
にしてもこんな可愛い子が近くにいるのに無反応とは鈍感だな・・・

「これより飛行訓練を開始する 希望兄弟、オルコット飛んでみせ  
る」

俺と一夏は0・05秒で展開する  
セリシアも俺達の及ばないが速い展開だった

「よし、飛べ」

俺達は飛んだがアルトとヴァイスのスピードは尋常ではないため  
セリシアを追い抜いてあつといつ間に200メートルに着いた

「お早いですね恭介さん」  
「まあ性能の差だな」  
「まあお兄ちゃんは万能だからね  
「そなんですか」  
「煽てるな、セリシアすまんが今度俺に付き合つてくれんか?」  
「えー! ? つつづ、付き合つてーーーーー」  
「すまん言い方が悪かつたな、訓練の相手になつてくれんか?」  
「そういう事ですか・・・ふ、ふたりきりなら・・・ーーーーーーーーーーーー  
「すまんな」

『急降下と完全停止をやってみせる田標は地表から十センチだ  
では恭介さん、一夏さんお先に行きます』

セコシアは一足に降下し急停止した。そこへとこか

「じゃあお先にいくから」「

一夏は一気に加速しての所で停止した

「さて行くか」

いつたん上昇し1500の地点で一気に急降下する  
とんでもないスピードを出し地面にぶつかりそのままヒュード急停止  
地面まで。0.01センチ危うく地面にファーストを捧げる所だった。

## I S 設定 隨時更新予定

アルトアイゼン・リーゼ

武装

スプリットミサイル

中射程ミサイル

煙幕やジャミング様々な使い道がある

5連チエーンガン

左腕に装備された連装機関砲で、牽制用の实体弾兵器  
3連マシンキヤノンよりも小口径だが装弾数や有効射程、速射性能  
が向上している

近距離の発射で高威力を發揮する

プラズマホーン

頭部ブレード

始動時に電撃がホーンに発生する

緊急用の武器としてだけでなく、障害物の除去にも使用できる

リボルビング・バンカー

右腕に装備された大口径ステーク

アヴァランチ・クレイモア

火薬入りのチタン弾M180A3を使用し、装弾数も増加した  
因みにアヴァランチは「雪崩」の意味

ビームライフル

アルトのアキレス腱である遠距離への攻撃を補う武装  
ライン・ヴァイスのハウリング・ランチャーを開発するに当たって  
このライフルを基にした

#### アルト専用試作零式斬艦刀

恭介が自身が剣術を使うためそのポテンシャルを最大限に引き出す剣  
形状記憶型の液体金属で作られており機体からエネルギーを供給す  
る事で

技に応じた形状及び大きさに変化・形状固定する

試作のため改良の余地あり

恭介が一夏と暮らし始め一夏を守るために設計、開発したIIS  
同時にライン・ヴァイスリッターも開発しコンビを組ませ戦う事  
を考えていた

機体コンセプトは『絶対的な火力をもつて正面突破』  
装甲はエネルギーを流すことで圧倒的な硬度を誇る  
更にアンチビームコードティングが施されている

コアには恭介が開発した次世代のエンジンが複数搭載されている  
そのため火力、加速力、防御力は全IIS中でトップを誇る

恭介との相性は抜群で驚異的な戦闘能力を發揮する  
ワントラック・アビリティ  
单一使用能力 不明

世代的には第7・8世代に分類させる

#### ライン・ヴァイスリッター

#### 武装

#### スプリットミサイル

アルトの物と同一

### 3連ビームキャノン

ハウリング・ランチャーの死角を補う

### ハウリング・ランチャー

実弾とビームの撃ち分け可能な武器

底部には尾のような形状のパーツが接続されている

実弾発射機構自体はオクスタン・ランチャーとほとんど変わつてはない

ビーム発射機構は大きく変貌を遂げており、Xモードを起動すると銃身先端が変形し

獣の顎の中には3本の口径の異なる砲身が出現し高出力ビームを撃つ

### ヴァイス専用日本刀

ヴァイス専用の刀

ヴァイスの接近戦を可能とする武装

斬艦刀と比べると小型で扱いやすいがパワーでは劣る

ビームを弾き返す事も可能

恭介によってアルトと同時期に開発されたIS

機体コンセプトは『亜音速で飛行することによって敵の攻撃をひとごとく回避し

その長距離兵器を駆使して超々距離から敵中枢に打撃を『与える』

当時は恭介が乗り分ける予定だったが一夏の強い希望により一夏のISとなる

一夏は持ち前のセンスによりあつといつ間に乗りこなし今では恭介との

コンビネーション技もできるよつになった

装甲は厚くはないが持ち前のスピードで攻撃をかわす

攻撃を当てることは難しい

アルト同様にコアには次世代のエンジンが複数搭載されており

機動性では全ISの中でトップに輝く

火力ではアルトに劣る  
ワントップアビリティ

単一使用能力 不明

世代的には第7・8世代に分類される

## クラス代表生 織斑 一夏？否、我は希望 一夏

「一組のクラス代表は織斑君に決定いたしました！」

パチパチパチパチ

クラスの女子から拍手を浴びる一夏

「あれ？お兄ちゃんやらないの？」

「ああお前はまだ青い経験を積んだほうがいい」

「あれで青いのか？恭介お兄さん？」

篠ちゃんが尋ねてきた

「ああ」とはまだ未熟者だ、剣もな剣のほうは篠ちゃんに任せると

せるよ

「ええ！？」

「（ほら練習で一夏で良い所見せれば好感度アップできるだ？）」

「（うう／＼そうですかね？）」

「（ああ俺もサポートするがアイツは鈍感だからな）」

「（わ、わかりました／＼）い、一夏！剣は私が相手をする！覚悟しろ！」

「解ったよっていつかお兄ちゃん面倒なだけなんじゃないの？ベーオウルフ」

ボコッ！

「誰が地球連邦軍特殊鎮圧部隊ベーオウルブズ隊長だ、いい加減にしろ」

「うう……めんなさい……」

「解ればよろしく」

一夏の頭を殴つた  
加減はしたがな

「新聞部の副部長をやつてるです薫子けど希望一夏君…すばり！  
クラス代表になつた意氣込みをどつぞー！」

「う～ん…」

一夏は少し考何か閃いた様に手を叩きハウリング・ランチャーだけ  
を展開し  
真剣な顔つきになる

「君の全てを撃ち抜くよ…」

「キヤア～！…！…！」

女子は大声を上げ鼻血を出す子もいれば  
真っ赤になつて絶垂れ込む子もいる

「／＼／＼な、なかなか厚いコメント有難う／＼／＼これなら捏造する  
必要はないわね／＼／＼

じやあ恭介さんは？」

「そうだな・・・」これから様々な困難があると思つがただ・・・

「ただ？」

「撃ち貫ぐのみ！」

「キヤア～！…！…！」

また多数の女子たちは鼻血出したり倒れたりした

「なにハウリング・ランチャー使つてるんだ馬鹿者」

「だつてえ、感じ出るじやん？」

「いい加減にしろ」

俺が注意しようと思つたら織斑 千冬が一夏に注意した

「・・・僕は貴方に注意される義理はありませんよ織斑 千冬」

「先生と呼べ」

「断る」

「!？」

「僕は既に織斑という呪縛から解き放れている存在 希望 一夏だ」

「・・・（強がるな一夏、慢心は見えるものを見えなくする）」

「（解つてゐよお兄ちやん）」

俺と一夏はお互この意思共有がIRCを通して可能

「お前は・・・紛れもなく織斑だ・・・」

「「「「え！？織斑！？」」「」「」「」

篠ちゃんを除き周りは驚いている

「・・・織斑？ぬ、我は希望 一夏」

「!..」

「お兄ちやん、僕は先に部屋に戻つてゐから」

「ああ

短く言葉を交わし一夏は部屋に戻る

織斑 千冬は呆氣を取られた顔をしている・・・滑稽だな

「俺ももう織斑 恭介ではない 希望 一夏の兄 希望 恭介だ  
千冬・・・もうお前の兄ではない・・・」

「……？？そ、そんな・・・」

「一夏の苦しみを考えてみる・・・織斑 千冬・・・」

お前との兄妹との縁もここまでだ

「……！」

俺はかつて千冬が一夏に言つたのと同じ意味の事を言つ  
織斑 千冬は立ち上がりそのまま何所かに去つていった

俺も部屋に向かい歩き始めた

廊下で俺は口を開く

「織斑 千冬・・・俺はお前を許さん・・・肉親に縁を切られた一  
夏の苦しみ味わえ・・・」

俺はそのまま部屋に入つた

一夏は既にベットに入り眠つていた

幸せそうな顔をして

「・・・お前は俺が守つてやる、お前が一人前になるまでな  
それからは自分の足で腕で意思を持つて決めろ・・・ぐつ！」

突然激痛が走る

俺は声を殺し胸を押さえる

「クッ・・・古傷が・・・」

奴を倒すために受けた傷

忌まわしい過去

あの時から俺は人間ではなかつたのかもしれない

「・・・お前は今の俺を見たらどう思う？」

窓から外を見ながら呟く

## 中国からの一夏の幼馴染登場

俺は席で自前のパソコンを叩き斬艦刀のチェックを始めた  
試作斬艦刀は途轍もないパワーを秘めている

俺の剣術に耐えるために頑丈にしておく必要がある  
ISのブレードでも俺の剣術には耐えられなかつた  
そのために開発したのが斬艦刀だ

因みに俺が使うのは示現流

「お兄ちゃんどう? 斬艦刀は?」

「ああいい感じだ、まだ使ってみないと解らんがなそれと転校生が  
来るらしいぞ」

「転校生?」

「ああしかも中国の代表候補生らしいぞ」

「中国か・・・」

一夏は何かを思い出すような顔をする

「セリシアと同じってことだね」

「その通りですわ」

「ちょっと不安かなクラス代表戦」

一夏は不安そうな顔をする

「大丈夫だよ一夏君! 専用機持つてるのは私達1組と4組だけだから

「その情報古いよ」

クラスの入り口で仁王立ちする少女がいる

「あれ？あの子・・・」

「もしかして・・・鈴？」

「・・・アンタもしかして一夏？」

「やつぱり鈴ちゃんか」

「えー？そういうあなたは恭お兄さんーー？」

「ああそうだよっていうか早く自分のクラスに戻ったほうが良いよ  
「え？それってどういうくバシンーー！」

鈴の頭に織斑 千冬の出席簿が破裂した

「さつさと自分のクラスに戻らんか

「は、はい・・・」

頭を抑えて鈴は去つていった

時間は過ぎて昼食時

「お兄ちゃん学食行いくよ  
「やつだな」

一夏と共に食堂に向かつた

そこには

「待つてたわよーー一夏、恭お兄さんーー」

田の前に鈴が現れた

「待つてたの？っていうかラーメンのびるよーー」

「あんた達が遅いからよーー」

とりあえず食事を持つてテーブルに付く

「元して何年ぶりだらうね」

「最後に会ったのは・・・5年ほど前だな」

「本当お久しぶりです恭お兄さん、髪短くしたんですね」

「ああ」

「お似合いですよ、一夏は髪染めたの?」

「いや色々あつてね」

「ふうん・・・あーそうだ恭お兄さん」

「ん?」

「彼女とはうまくいってますか?」

「――」「――」

声は大きくなかったため他の生徒には聞こえてはいない

「・・・ああまあな・・・」

「そうですか」

「・・・お兄ちゃん・・・」

一夏は心配そうに俺を見る

「気にするな一夏・・・昔の事だ」

俺は食器を片付け残りの授業に専念した

俺は授業が終つたら部屋に戻りベットに腰掛、外を見る

「・・・」

唯無言でひたすら外を見る

そして掛けていたペンダントを開き写真を見る

そこには俺の腕に腕を絡ませ一夏の頭に手を置き笑顔でいる女性

その写真の俺は今では決して見せない笑みを浮かべ

一夏の肩に手を乗せている

一夏は満面の笑みを浮かべている

「・・・本当にお前にはもう会えないだよな・・・」

俺は気付かぬうちに涙を流していた

「・・・すまん・・・俺のせいです・・・うつ・・・

声を殺し俺は泣いた

ひたすら誰かに謝るよう泣いた

## 中国からの一夏の幼馴染登場（後書き）

いつたい恭介のペンダントに入っていた写真の女性はいつたい！？  
更なる謎が現れ加速する物語

恭介は何故謝つていたのか！？

恭介の身体に刻まれた古傷を引き換えに倒した敵とは！？

恭介の心には何が映るのか！？

## 恭介の憎しみ

さて今俺は観戦席に座り一夏の試合を眺めている

相手は中国の代表候補生 凰 鈴音

パワー型の甲龍と機動性重視のヴァイス面白い試合だ

最初はお互いの剣で切り合いをし

その直後に一夏は距離をとり得意な距離まで後退した

がそれを読んでいたのか肩のアンロック・ユニットが開き球体が光る  
目には見えない攻撃にも一夏はあるで見えるかのように避けていく

「（さて行くかな？）」

「何故疑問系？」

I.Sを通して一夏の考えが頭に入つてくる

「わお～ん！と、ハウリング・ランチャー、いつてみましょか！」

一夏はお得意の超高速移動での射撃を開始する  
パワー型のだけに機動性は低くあまり避けられらてはいない  
一夏はBモード攻撃しようと思ったそのときー  
黒煙が上がり爆発が起きる

そしてモニターにもう2機のI.Sが見えた

俺はそいつを見たときに怒りに包まれた

それは織斑 千冬の専用機白騎士に酷似していた

俺は許可も取らずにアルトを展開しアリーナの遮断シールドに向かい

「撃ち込む！」

リボルティング・バンカーを撃ち込む進入した

そこでは一夏が鈴を庇い必死に攻撃を避けていた

「くつそー」

ハウリング・ランチャーEモードで攻撃をするが狙いが甘く避けられる  
すかさず敵に接近し斬管刀を引き抜き応戦する  
ギン！ギヤギン！ギンン！  
激しい剣の鍔迫り合い

「うおおおーーー！」

一瞬の隙を突き敵を一刀両断にする

「我が斬艦刀に、断てぬものなし！」

俺はもう1機に向かい合う

こいつら・・・無人機だな・・・

「お兄ちゃん！」

一夏は俺に問いかける

「一夏・・・お前は邪魔だ・・・引くんだ・・・」

「わかった・・・よ」

一夏は自分も戦いたいと言つ顔をするが大人しく引く

「・・・ようによつて白騎士とはな・・・

あの時・・・お前と束のせいで・・・アイツは・・・」

アルトマスク越しだが俺は涙を流している

「うああああ……」

スラスターを一気に開放し敵に接近し敵を殴りつける

「うああああ……白騎士いいい……」

クレイモアを開幕に浴びせる

「まだまあまあ……」

ライフルを持ち全武装のリミッターをはずし敵に撃ちかける

白騎士は回避しきれずに攻撃を食いつ

白騎士は戦闘不能となるが俺は攻撃の手を休めない

「お前のーお前のせいでええええ……」

「お兄ちゃんー！」

一夏が俺の腰に手を回し止めようとする

「離せえー！一夏あああ……」

「僕だつてお兄ちゃんの気持ちは解るーナビ！」んな所でお兄ちゃんの気持ちを爆発させいやダメだよーー。」

「だがああーー！」

「お兄ちゃんーー！」

「あ・・・あ・・・・」

「僕達の目的を忘れたのーー？」

「忘れたことはないーー。」

「なら戻ろつよ？ね？」

「あ、ああ・・・・」

俺は一夏に肩を貸してもらい部屋に戻った  
途中で千冬とあつたが無視し部屋に戻り俺は眠りに付いた

## 恭介と一夏の過去

僕はベッドに寝ているお兄ちゃんを椅子に座つてみてくる

「お兄ちゃん・・・」

僕だつて白騎士は途轍ないぐらに憎いさ

でもあんな所で憎しみを爆発させる事はないよ・・・

お兄ちゃんが言っていたアイシとはお兄ちゃんの家に居た時に  
僕に優しくしてくれてお姉ちゃんと呼んでいた人の事だ

コンコンッ

あれ?誰だろ?う?

僕がドアを開けるとセリシア、篠、鈴、山田先生がいた

「・・・何のようです僕はお兄ちゃんの看病で忙しいんです」

「一夏、恭お兄さんは?」

「今は眠っているよ」

「あの一夏くん、恭介くんはなんであんなに白騎士を?」

「・・・話すわけにはいかないね」

「なんですよ!?」

「これは僕たちの過去を話せなきゃいけないんだ」

「だったら話してよ」

「算・・・後悔しない?」

「もちろん」

「私もですか」

「セリシア・・・解かつたよまず入つて

僕は4人を部屋に入れた

「ねえ一夏、あなた達に何があったの？」

鈴が尋ねてきた

「・・・まず僕達の過去を話さなきゃいけないね」

時は遡る事数年前・・・

僕は兄さんと暮らし初めて直ぐの事だったよ  
僕はまだその国暮らしにまだ馴染んでいなくて家に閉じこもりが  
ちだつたんだ

でもある日お兄ちゃんの家にある人が来たんだ  
その人はお兄ちゃんと同じ国最高レベルの高校のクラスメイト  
だつたんだ

僕はその人をとても警戒してたんだ

織斑 千冬の事もあつて僕は女人を警戒してたからね

「おーおー一夏こいつは大丈夫だ、こいつは俺の親友だ」

「本当?」

「ああ」

僕はお兄ちゃんの言葉に聞いて僕はその人に近づいたんだ

「宜しくあります」

「あります?」

「ははは、「イツは日本語が巧いんだけど巧くできない」というがあるんだ」

「むう・・・」

「・・・あはは改めて宜しくねお姉ちゃん」

「お姉ちゃん?」

「お?なんだなんだもうお姉ちゃん呼ばわりか?」

「うう・・・」

「わ、私で姉になつても・・・」

「ほんとー宜しくお姉ちゃんー！」

それが僕とその人の出会いだつた

その人はなんか日本語変な部分があつたんだ

でもその部分が面白くて僕は懐いたんだ

その人は優しくて僕の事をお兄ちゃんと一緒に僕のことを何かと構つてくれたんだ

一緒に海に行つたりピクニックに行つたり沢山の思い出を作つたよ

でもあの日が来たんだ

お兄ちゃんの発案で日本に行つてお姉ちゃんに日本を案内しようつてことになつたんだ

最初はよかつたよ

水族館に行つたり日本食を食べたりお寺に行つたりしたよ  
でもね・・・白騎士事件が起きたんだ・・・

「で、でもー!ミサイルは!」

「ああ白騎士が迎撃した事で有名な事件だ

でもね・・・白騎士が迎撃し損ねたミサイルが僕達に落ちてきたんだよ

「ええー?」「」

その人は僕とお兄ちゃんを庇つてミサイルを食らつて・・・

僕たちが気付いたときにお兄ちゃんがお姉ちゃんにプレゼントし黒焦げになつた

指輪とペンダントが見つかったんだ

でもお姉ちゃんの姿は何処にもなかつた

その後僕たちは必死に探したけど見付からなくて

警察にも言つたけど出したけど見付からなくて色々な病院に回つた

けど居なかつた

お姉ちゃんは死んぢやつたんだ・・・

その時僕はお兄ちゃんにしがみ付いて泣き続けたよ

お兄ちゃんは悲しみを押し殺して僕を抱きしめてくれたよ・・・

だけど夜にお兄ちゃんがリビングでお姉ちゃんと御揃いのペンダン  
トを握り締めて  
泣いてたんだよ

お兄ちゃんが泣いてる姿は初めて見たよ

それだけお兄ちゃんにとつてお姉ちゃんの存在は大きかつたんだ  
そして白騎士が「ブリュンヒルデ」織斑 千冬だつて事がわかつた  
さらにお兄ちゃんが全ての人脈を使って2年をかけて白騎士事件を  
起こしたのが

I.Sの生み親 篠ノ之 束だつて事がわかつた

そして僕達の目的が決まった

「目的って何ですか？」夏くん？

「そこまでだ」

「！」

お兄ちゃんが身体を起こしていた

「もういいだらつ、そこまでだ俺達の目的を教えることはない」

「そうだね話はここまでだよ」

この後4人には帰つてもらつた

「いつから？」

「最初からだ、まさか織斑 千冬に縁を切られた事まで話すとはな

「これで僕があの人の事を憎んで居る事が解かつて貰えるよ

「まあな・・・だが俺達の目的を話すなよ」

「うん」

「俺達の」「僕達の」

「「目的は」」

「「織斑 千冬及び篠ノ之 束に対する肅清、抹殺」」

「それを忘れるなよ」

「うんお姉ちゃんを殺した事を絶対に許さない」

そう僕達の目的はこの二人の死だ  
この以外の目的などない

## 仲間からの連絡

今日は俗に言う休日だ  
はつきり言おう

「暇だ・・・」

一夏は篠ちゃんに連れられて何所かに行つた  
俗に言うデートだな  
アイツもいい加減に彼女作れよ  
天然一級フラグ建築士が・・・  
俺は可能な限り暇を潰している  
本を読んだりお菓子作つたりＩＳの点検したりだが暇だ・・・  
現在午前10時・・・夜にはまだまだ時間がある・・・  
ああ・・・憂鬱だ・・・使い方あつてるか?  
ヽヽ

ん?このレッドワカメヘアーの着信音は・・・  
俺がボタンを押すとスクリーンには赤ワカメがいた

『誰が赤ワカメだ!-』

「誰に言つてる?」

赤ワカメ・・・もといかつて敵同士であつたが今は仲間になつた  
アクセルからだ

「どうした?そつから掛けてくるなんてどういう風の吹き回しだ

?』

『おいおいいくら住所不定だからってそんな言い方ないだろ?』  
『だつたらいい加減定住しろ』

『わ～たよ説教は勘弁してくれ

「つでなんだ何か用か?』

『用がなきや掛けね～よ、ソウルゲインが完成した』

「やつとか、遅すぎだ』

『わりいな、なにせ武装強化に熱が入つてな

「あまり無茶をするなよ

『くくく・・・なつはは！-計画のターゲットがいる学院にいる奴に言われるとはな！』

「・・・説教3時間たっぷりされたいか？』

『それは勘弁だ、でソウルゲインだがよ

玄武剛弾を衝撃弾にして発射できるようにしてずっと両手が健在の状態にできる

さらに遠距離戦カバーにソードブレイカー付けたぜ』

「なんといつか相変わらず機体の弱点カバーはお手の物だな』

ソウルゲインは素手による格闘戦機とされ

接近戦が主であり遠距離武器は両手の掌に青いエネルギーを収束し

撃ち出す  
せいつりゅうづく

青龍鱗しかない

だがアクセルは自分が考えた自動誘導可能攻撃ユニット

ソードブレイカーをソウルゲインに装備しアキレス腱を解消したまったく弱点を補うと言つ点ではこいつの右に出る者はいない

『あと直ぐに俺もそつちに行くぜ』

「おい待てお前まさか！ IS学園来る気か！？」

『That'sライ！これがな！-』

「じゃないだろ！このアホセル！』

『俺はもう記憶喪失ではない！-って言つたが決定事項だ』

「おい！？』

『グッバイ

』

ブツツ

「おーーーあんの野郎・・・」

あいつは言に出したら聞かないどうしたい・・・?  
まあ流れに身を任せるか

### 3人の転校生 蒼い戦神

「お兄ちゃんそれ本当?」

今は夜9時半

昼間にアクセルから連絡が来た事を伝えた

「ああ奴の専用機『EG-X-ソウルゲイン』が完成した」

「まさか・・・」

「ああIS学園に来る」  
〔イー・エス〕

「マジ?」

「ああできれば?と言いたいがな・・・」

俺と一夏は同時にため息を吐いて一日が終った  
そして次の日・・・

「今日は転校生がいます!しかも3人も!」

副担任の山田先生が言い放つと女子たちは騒ぎ始めた  
そんな中に転校生が入ってきた  
ひとりはめちゃくちゃ見覚えのある赤髪を見て  
俺と一夏は手を額に当てる

「シャルル・デュノアです

フランスから来ました 宜しくお願いします

「お、男?」

「・・・(お兄ちゃん・・・デュノアって・・・)」

「(ああ・・・彼は・・・いや彼女だな・・・)」

「(え・・・女の子?)」

「（ああ・・・かんだがな）」  
「（かんですか・・・）」

### 意思共通で会話する俺達

「挨拶しろラウラ」

「はい教官」

「ここでは織斑先生と呼べ」

「了解しましたラウラ・ボーデヴィイッヒだ」

「「「」・・・」」「」

「（ラウラ・・・黒兔か・・・）」

周りは先ほどまでの賑やかさは消えうせしへんとする

「え～っと以上です・・か？」

「以上だ」

「（つわー簡潔ー）」

彼女は一夏と目を合わせるなり一夏に近づいてきて殴りつとするが  
アクセルが拳を受け止める

「！」

「おーおートイツって国は初対面の人を殴るのが挨拶か？」

「貴様・・・」

「おい・・・」

俺は立ち上がりラウラに向き合つ

「一夏に弟に手を出すなら俺が相手に出すぞ・・・」

無意識にアルトリングが鈍い光を放っていた

「弟だと？」

「ラウラいい加減にしろ、希望 恭介お前も座れ」「・・・」

俺は黙つて座つた

ラウラも一夏からはなれた

「さて最後は俺か、俺の名前はアクセル・アルマーだ  
趣味は身体を動かす事だ気軽に話しかけて貰えると助かる」

お決まりパターンでアクセルの女子達の黄色い声を浴びた

「ではHRを終わる各人着替えて第二アリーナに集合  
2組と合同でIS模擬戦闘を行う解散！」

千冬が声を上げてHRが終つた

「希望兄弟、お前達でアルマーとデュノアの世話をしろ

「えつと・・・僕はシャルル・デュノアです宜しく」

「宜しく僕は一夏 希望 一夏だよ」

「俺は希望 恭介だ」

「アクセルだ」

「宜しく」

「つというより急いだほうがいい男子はいちいちアリーナの更衣室

で着替えなきやいかん

ごたつくが慣れてくれ

「うん」

「つていうかもつれてるぜこれがな

アクセルがいと廊下には大量の女子で埋め尽くされていた

「つわ～・・・

「果然としている時間はない、シャルルすまん

「え？」

シャルルを抱き上げる

云われるお姫様抱っこだ

「一夏、行ぐぞ」

「うん」

「おいおこマジであそこから行へのか？」

「ええ！？何処から！？」

「窓からつだ！..」

俺たちは窓から飛び降りた

「　　「　　「　ええ～…………」

女子たちは驚いているが俺たちは無事に着地し更衣室に向かう

「と、飛び降りるなうさきにこつてよー！／＼／＼

「わりいな」

「つか早く着替えよつ

「ああ」

俺たちは更衣室に再び向かつた

# 何で俺まで？

「ねえねえ聞いた聞いた？」

「聞いた聞いた！」

# 「何の話？いい話？」

「最上級にいい話！！

「今」の学年別ナメ

今月の学年別一覧表

「アーヴィング」

なんと！一夏君か！恭介さんと付き合えるんだって！」

「俺達がどうかしたか？」

「何だ・・・失礼な・・・」

魏氏一書二

俺たちには周に着いた

筆者から事情を聞いた所、年別トーナメントで優勝したときも、つてもう

と言つたはいいが誰か聞かれていたらしくそれで兄である俺まで巻

き込まれたらしい

「さて一夏アリーナに行つて訓練するぞ」

「えへん」

「諦めろ、一夏これがな」

俺は一夏の首根っこを掴み引きずる  
だがアリーナから暴発音が聞こえた

卷之三

「なんだ!?」

俺達は急いで向かつたら

セリシアと鈴がやられていた

しかもラウラは一人に止めをさそうとしていた  
だが俺が一瞬にして間に割り込み素手で攻撃を受け止めた

「なに！？」

「恭介さん？」

「恭お兄さん？」

「やれやれ何をしてこらカクア～これ以上やるなら・・・俺が捻り  
潰すぞ・・・」

俺は殺氣を丸出しにしている

「邪魔だ」

「お前がな・・・」

俺は無意識にアルトとは別のHSを取り出す  
爪などの装飾がされ野生的な印象を受ける

「おいおい恭介の奴あれを使つ『気か

「まあしじうがないって奴だよ」

俺は怒りに任せてHSを起動させる所だったが  
千冬が割り込んできた

「ひつ・・・」

舌打ちをしセリシア達を保険室に連れて行つた

「あのまま戦ついたらやばかったな」

保険室で俺は一夏とアクセル、シャルルを連れ、話をしている

「一人ともE-Sのダメージも大きいよ」

「うう・・・」

一夏が珍しく的を射た事を言った

「今失礼な事考えなかつた?」

「別に」

ドタドタ・・・

なんか音が聞こえる

バタン!!

ドアが壊れんばかりの勢いで開いた  
そこにクラス中の女子達がいた

「何の騒ぎだ?」

「これ……」

女子達は紙を見せてくる  
それをアクセルと一夏は見る

「えーっと・・・次回の学年トーナメントをタッグ形式行います  
ので生徒同士タッグを組むこと  
タッグが組めなかつた場合抽選で決定するつと・・・」

「つまり・・・」

「君たちは俺達と組みたいって事?」

勢いよく頭を振る女子達

「悪いな俺達は相手が決まってるんだ」

それを言ひつと女子たちはガツカリして帰つていつた

「まあ本当は決まつてないんだけどね」

「あんなに困まれたら決め辛いだろ？」

「まあそうだね」

「で？誰が誰と組むんだ？」

実際そんな事に興味されなかつたからな俺達3人は  
シャルルは知らん  
すると山田先生が入つてきた

「オルゴットさん、凰さん今大丈夫ですか？」

「はい」

「大丈夫です」

「二人のISのダメージレベルがCを超えてしまいました  
ISを休ませる意味でも大会には出れませんよ」

「ええ！」

「そんなんあーーー？」

二人は大きな声を上げ落胆しているようだった  
まあ解るがな

「まあ今回はしょうがないぞ」

「ああ大人しくしてな」

「「はい・・・」」

声がかなり小さいが納得してくれたようだ

「それと恭介君と一夏君にはお知らせがあります」

「お知らせ？」

「はい新しく2人男子が入つたので部屋の移動をお願いしたいんです」

「まあしょうがないな」

「うん」

俺と一夏は別に構わない

「そうですか。では一夏くんは1025室になります」

「はい」

「恭介君は変わりませんがデュノア君と同室をお願いします」

「わかりました、宜しくなシャルル」

俺はシャルルに手を差し出した  
シャルルは戸惑いながらも握手に応じてくれた

「二、こちらこそ」

「アルマー君はそのお・・・」

「?」

「私と・・・同室になります・・・」

「・・・マジですか?」

わおアクセルは山田先生と同じ部屋か

この後俺達は部屋に戻り一夏は荷物を持って移動し  
シャルルが部屋に来た

さて・・・パートナーは誰にお願いしよう?

向で俺まで？（後書き）

ここにアンケートです

恭介のパートナーを募集したいと思います  
ひとり3票まで投票は可能です  
皆様のご協力お願いいたします

## シャルルの眞実

「ああ～風呂入りてえ～」

「アクセルお前そんなに風呂好きだつたか？」

「そう言つ訳じやないが湯船に浸かりたい時があるんだよ

俺達は更衣室で着替えをしながら雑談を交えていた  
シャルルは先に部屋に戻りシャワーを浴びるとか言つていた

「にしても女性と部屋が同じってのは辛いぜ」

「まつ山田先生なだけましだろう女子だつたら襲われるぞ」

「それはやめてほしいなつてか一夏、お前も筹建と一緒にだらう？」

「一夏の場合は相手が幼馴染だからな

「ちえ一夏少し妬ましいぜ」

「男の嫉妬ほど見苦しいものはないぞ」

「つるせ～」

着替えを終え互いに自分の部屋に戻る

シャルルはシャワーか・・・

あつそういうえばリヌスが切れてな

リヌスのボトルを持ちシャワールームのドアを開けると

・・・湯気を纏い、タオルを羽織つており胸の部分には膨らみがある

「きや！恭介！？」

「あつ・・・リヌスのボトルここに置いとくからな  
「へ？あ、うん・・・」

さつやと用を済ませシャワールームから出る  
ベットに腰掛シャルルが出てくるのを待つた

そして着替えたシャルルが出てきて俺の隣に座った

「・・・／＼／＼」

「別に話さんでも理由ぐらいは想像出来るが教えてくれんか？  
女であるシャルルが男装までして此処にいるのか？」

その後シャルルは真実を話してくれた

デュノア社の命令である事や本妻の子ではない事  
様々な事を他人である俺に話してくれた

「今話したことが全てだよ」

シャルルの顔は悲しそうだった

スツ・・・

俺は黙つてシャルルを抱き寄せた

「へー？ ちょ！ きょ、恭介！ ？」

「安心しろお前は一人ではない」

「え？」

「俺と一夏は親の顔さえも知らないし親に捨てられた身だ」「・・・その・・・」

「一夏の親は俺みたいな物だあまり気にするな  
それとシャルルこれからどうする？」

「どうつて・・・僕には選ぶ権利は・・・」

「だったら此処に居る」

「え？」

「特記事項第一、

本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる國家・組  
織・団体に帰属しない

本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されな

いものとする

つと記載されている「

・・・じゃあ」

「3年間は此処に居れる、味方は俺だけではない  
アクセルに一夏もいるしな」

「でも・・・卒業しちゃつたら・・・」

「それだったら俺の所に来るか?」

「え!？」

下手をしたらプロポーズにも聞こえる台詞  
だが俺は基本的にアイツ以外には興味はない

「家族が一人増えようが変わらんしもしもの時は  
デュノア社を粉碎するまでだ」

「恭介だったらそれ本当にやりそุดから恐いんだけど・・・

「ん? そうか?」

「でも有難うね」

「礼には及ばんよ」

俺はシャルルを解放し部屋を出た  
廊下を歩きながら呟いた

「偽善者ぶつてんじやね〜よ俺

俺の目的は復讐だ家族を台無しにした復讐だ

正義なんて要らん目的のためになら俺は悪になら

「ひひ」

## 始まる学年トーナメント 恭介＆一夏vsアクセル＆ラウラ

ついに学年トーナメント当日

俺はと一夏と組む事し

アクセルはなぜかラウラ

アクセルによると相手がいないという事でかなり一方的に決定されたらしい

まあ面白そうだな

そして最初の相手は・・・アクセルだよ

決着はここで着けるつもりはないがな

第一リミッターをかけまくった状態で勝つても嬉しくない

そして俺達は向かい合つ

「恭介」で決着はつけようとほ思つてはないぜ俺は

通信で俺に語りかけてくるアクセル

「ああ俺もだ

「なあどうせならあれみたくやんね？」

「？アインスケ風にか？」

「そうだ

「まあいいか

俺達はI-Uを展開する

「一夏、俺はアクセルの相手をするからできるだけ良いからラウラを

食い止めてくれるか？」「

「うんいいよ」

「サンキュー・・・お前達は・・・望まれない世界を作る・・・」

「え? 何言つてるの?」

「(アクセルにやつてくれつて言われたんだ)」

「(ああなるほどね)」

「ふつだが俺はその世界と決別する この敗北の先に勝利を得るために!」

「勝利・・・敗北・・・そこに意味はない・・・破壊するか作り出されるか・・・」

創造は破壊・・・破壊の創造・・・お前は箱舟と共に朽ちよ・・・『では対戦開始!』

アナウンスが響く

一夏は手筈どりにラウラに向かう

二人は空中でハイレベルな射撃戦が繰り広げられる

「寝言はそこまでだ!..」

アクセルと俺は全く同時にブーストを掛け突撃し地面はその衝撃で抉られる

お互に組み合つ

「舐めるな!!パワーなら!!」

ソウルゲインは更に力を増し押し始める

「押せ! アルト!!」

スラスターを開きその勢いを使い押し返す

「なに！？ならば・・・青龍鱗！？」

手にエネルギーをため放つが恭介はそれを逸早く察知し後退しチーンガンを連射する  
アクセルは上昇し回避をするが恭介は先回りしバンカーを構える  
がアクセルは回転し腕を回転させ拳と拳がぶつかる

「「おおおおお！――！」」

ラウラはチャンスだと思い恭介に向かうが

「おつと！お兄ちゃんの戦いに邪魔はさせないよ！」「つち！では貴様から先に！織斑　一夏！――！」

「織斑？否、私は希望　一夏！――！」

再びハウリング・ランチャーを構え  
片手にヴァイス専用日本刀を構える

「君なんて僕一人で事足りるんだよ！――！」

千冬サイド

私は最愛の兄であり誰よりも強く優しかった恭兄と一夏の戦いを見  
ている  
が私の目はどうかしてしまったのか？

一夏は重力なんて完全無視しているような素早い動きでラウラを圧  
倒している

速すぎる・・・瞬時加速を使用してもあそこまでの  
速度は出せない・・・

恭兄はアルマーとハイレベルな格闘戦を繰り広げている

イグニッション・ブースト

しかも互いにエネルギーを減らしていない……

一夏も同様だ

「す、す！」……』

隣の山田君は驚きの声を漏らしているエネルギーを減らしているのは  
ラウラのみ

『『『ふふふ・・・』』』

するといきなり恭兄、一夏、アルマーが笑い始めた

『久しぶりに血が騒いできたなあ・・・ベーオウルフ！…』

ベーオウルフ？

恭兄の事か？

『そうだな、アクセル・アルマー・・・その名呼ばれるのは久しぶりだ・・・』

『お前もそうだろ？白き閃光よ？』

『二人は良いけどさ僕はテンション低めだよ、蒼き戦神』

『ふつ・・・赤い戦神殿はどうだ？』

『ああ・・・だが制限を付けたままだからな』

これで制限を付けているといふのか！？

『これでえ！…！…』

一夏の持っていた銃の銃身先端が変形しき本の口径の異なる砲身が  
出現し

攻撃を放つ

それはラウラに命中した

『くつ・・・これで俺一人か・・・』

千冬サイドアウト

恭介サイド

俺はアクセルと向かい合っている  
がいきなりラウラに変化が起きた

「おい一夏まだ終りそうにないぞ」  
「みたいだね」

## 白毛閃光の力

俺達の目の前でラウラのHSは変化していた  
ドロドロに解け全身<sup>フルスキン</sup>装甲タイプに近いHSと変化している

「これって形態移行じゃないね」

「ああまさかこんなイカサマカードを隠し持っていたはな」

そして剣を振るい攻撃してきた  
俺はそれを斬艦刀で受け止める

「つてかあれ千冬にてね～か？」

アクセルが疑問に思う

確かにそうだ

攻撃パターン、武装、回避モーションパターンが千冬そのものだ  
がラウラはアクセルにも攻撃をしてきた

「おいおい見境なしがよ？」

「そういうながら軽く避けるな」

「お兄ちゃん、あれの始末は僕が着ける」

「一夏」

「よくも・・・あんな奴の・・・」

一夏からには怒りが伝わってくる

「任せるアクセル異論は？」

「ない、俺は見物させてもらひつぜ」

一 夏は飛び上がりラウラに向かう

「一夏の奴・・・大丈夫だろうな?」

「心配するな俺が特訓したんだ」

「あつそれなら大丈夫だな」

### 一 夏サイド

・・・ 哀れだね・・・ 力を望んで手に入れたのが  
ブリュンヒルデの力か・・・

「ねえ・・・ 君、力を望んだならなんで織斑 千冬の力なんて望ん  
だのさ?」

ラウラは構わず切りかかってぐるが日本刀で受け止める

「どうして自分自身力を引き出そうとしないの?  
何で自分で憧れの存在に近づこうとしないの?」

君は僕と同じだね、僕も昔はお兄ちゃんに近づきたかった  
それでお兄ちゃんの戦闘データをヴァイスにインプットして戦つた  
でも僕はボロ負けした理由なんて簡単だった  
自分の力じゃなくてお兄ちゃんの力に頼らうとしたから  
その日から僕は自分の力を引き出す最大限に引き出す戦い方をする  
ように

心がけたそれだけでお兄ちゃんと互角近くに戦えるようになった

ラウラはまるでその話を聞いているかのように動かない

「・・・ 決める」

持っていた刀を居合い切りの要領でラウラを斬りつけ  
ヴァイスのエネルギーを利用して一気にラウラのエネルギーをゼロに  
した

僕はその時彼女の声が聞こえた気がした

なぜお前はそれほど強い？

「僕は強くないよ、未熟者さ」

未熟者だと？あれほど力を持つてきてもか？

「力っていうのはさ、人を守つたり目的を果たした時に価値がある  
と思うんだ」

では・・・お前の目的は何だ？

「僕の目的はね、お兄ちゃんと肩を並べられるようになる事と  
ある人達を倒す事だよでも今はお兄ちゃんと生活と  
友達を守る事かな？」

守る？

「うん、君も守るよ

私はお前の友達ではない

「だったら今から友達だね」

その時には彼女の声は聞こえなくなっていた

「一夏よくやつたな

「あの居合い切りなかなかのものだったぞこれがな

僕は彼女をお姫様抱っこした

「ラウラを医務室に連れて行こう

「ああそれが一番だ

「ああ、今回の一夏の一人勝ちだな

僕達はI.Sをか解除して医務室に向かつた  
医務室に彼女を寝かせた

「俺が見ているお前らは飯でもいって來い」  
「僕はシャワーいって来るよ」

「俺は飯だ」

一夏サイドアウト

## 久しぶりに風呂に行こう

俺はラウラが目を覚ますのを待っている  
話したい事があるからな  
・・・しばらくして彼女が目を覚ました

「よお起きたかい？」

「ここは？」

「医務室だ、一夏がここまで運んだそして聞きたい事がある」

「聞きたい事？」

「君はヴァルキリー・トレース・システム通称VTSシステムを知つてるか？」

「過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステム

だがアラスカ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されている

「ああ、君の言つた事に間違いはないそして君のエヒにはそれが搭載されている」

「！？」

ラウラは田を見開く

「君の攻撃パターン、武装、回避モーションパターンが千冬そのものだつたよ  
あれは千冬のと同じだったよでも、過去の千冬では一夏に勝てない」  
「・・・お前は教官の何なんだ？」  
「知りたいか？」  
「ああ」

「俺は元織斑の人間だ、そして一夏と千冬の兄でもある

「教官のー?」

「ああまあなじやあ俺はこれで」

俺は座っていた椅子から立ち上がり  
医務室から出て食堂に向かう

「トーナメント・・・中止・・・」

「交際・・・無効・・・」

「嫁の座・・・消えた・・・」

「……………」

・・・何があつた?

女子達は嘆いている

笄ちゃん顔をテーブルに沈めている

何があつてなぜこうなつた?

「おー!アクセル何があつた?」

俺は豚カツ10枚にキャベツ大盛り、味噌汁、ご飯特盛りに  
喰らいついているアクセルに聞く

「ん?なんでもトーナメント中止らしいぜ」

「そつかにしてもよく食うな」「な

「お前もこれぐらい食うだろ?」

「まあな」

俺もアクセルと同じいやそれ以上の量の食事を持つてくれる

「おお・・・」  
「ではこの世の全ての食材に感謝をこめていただきます

手を合わせ食べ始める

「おむ・・・モムモム・・・あ・・・ガツガツ・・・」  
「あ・・・」

俺の食べている料理はどんどん減つていぐ

「は・・・はえ・・・」

「モムモム・・・ふう・・・アクセルすまんが」飯のお代わり持つ  
てきてくれ」

「お、おづ・・・つてえおい！俺はパシリか！－こらあ！－」

「・・・数量限定超大盛り特製超絶最強激ウマラーメンの整理券で  
いいか？」

「わっかりましたあああ！－お待りください－只今特盛りでお持  
ちします！－！－！－！」

アクセルは走り出す

すると山田先生がやつて來た

「あ！恭介君！此処に居ましたか！つて凄い量ですね・・・

「これぐらい普通です」

「そ、そうですか・・・い・ユースです！

男子にもお風呂の使用許可が下りましたよ！」

「そうですかで食べ終わったら早速行くとしますよ

「使えるのは火曜日と木曜日と日曜日ですから

「わかりました」

「持つてきましたああああ！－！－！－！」

アクセルがご飯を持ってきた

「サンキウモリバ」

アクセルに整理券を渡す

アクセルは走つて何処に行つてしまつた

さて風呂に行こう

俺はさーさと食い縋れり風呂に向かうた  
服を脱ぎ一応腰にタオルを巻き身体を洗い湯船に浸かる

「ふう・・・いい気持ちだ・・・」

久しぶりに風呂に入つた  
すると誰かが入つてきた

「ん？一夏か？それともアクセルか？」

「シャル?」

入ってきたのはタオルを巻いたシャルだ

「おい俺は男だぞ？」

「そりだつたな」

「あ、ああ」

俺は湯船から上がりシャルの頭を洗う  
髪が柔らかい気持ち良いな

「痛くないか？」

た  
ナヌヰたよ

卷之三

湯で泡を流す

ホニタモト

「靈光」

ג' ע' ע' ע' ע' ע'

がシャルは俺と顔を合わせようとしたしない  
俺も内心はドキドキしている

「卒業したらどうするか決めたか?」

卷之三

「僕の所は来るが?」(ハニカム)

「奄は別の妻」

「俺は別の構わんぞ家族が増えるだけだ」

俺が言ってるんだ問題はない

? .

13

うわあ・・・一夏またフラグ立てたの?ツ て俺もか・・・

「ええ、つと・・・今日は転校生?って言うのかな・・・」

翌日の朝山田先生が入ってきてHRが始まった

「（ねえ何で疑問系なんだろ？？つてかシャルルは？寝坊？）」「（う前二一諸二するな一夏、心配するな真、二来る）」

では入ってきてください・・・」

入ってきたのは女子の制服を身にまとった  
シャルルだった

「シャルル・テュノア改めまして希望  
シャルロッテです直しくお  
願いします」

昨夜

「何？女に戻り転校し直す？」

1  
うん

# 湯船に浸かりながら言われた言葉

「どうせなら早いほうが良いかなって……そ、それで……そのあ……希望つて姓使つても良いかなって……」

冗談だ

俺はあいつ一筋だ

— それなら問題ない俺は23た業

「アーティストの」

「へえ」・・・僕は・・・妹とし

「そうか・・・ではこれから希望シャルロットだな  
ではさつそく千冬の所にいかんとな」

つと並んで、何事かあった

が嘘が気になつたのは、希望<sup>ヒツヨウ</sup>俺達と同じ名字だから

「恭介さん！？どういう事ですか！？」

## セリシアに詰め寄られる俺

「一 夏・・・お前ええ・・・」

篠ちゃんからは殺気に満ちた視線が一夏に向けられている

「ちよつとーーー? 篠いーー? 僕は何にも分からんんだつてーー? お兄ちゃん、どうしてこうなったーー? 」

俺に振るな

無茶言ひな！！

「はあ・・・わかつた判りやすく教えてやる

シャルは家族と縁を切る事になってしまった道的な立場から  
俺が引き取り娘とも思うとも言える感じなった

「ああそういう事……って！初耳なんですけどおお……」  
「当たり前だ今言つたんだからな、そう言えば……」

「夏お前昨日風呂は言つたか？」

「へ？ 入つたけど……」

「そうか俺はシャワーだけで寝てしまつたからな」

「ちょっとまつて！－！デコロじやなくて！希望さんガ女つて事は  
一夏君と入つたつて事だよね！－！？？」

「え！－？？なんで！－！？？」

「－（アップ・・・）」「（俺とシャル）

その時、修理が終つた甲龍を纏つた鈴ちゃんが一夏に襲い掛かつた

「！」でしねええええ！－！－！」

「ぎゃああああ－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！」  
現実で死ぬうううう－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！

「！」

ド、ゴオオオン！－！－！－！－！

どうやら最大パワーで龍砲を撃つたらしいな

まあ成仏せいや・・・ナンマンダブナンマンダブ・・・

煙がはれるところには

「はあはあ・・・はあはあし、死ぬかと思つた・・・

シユヴァルツェア・レーゲンを纏い一夏をギリチヨンで助けたラウラの姿があつた

「あ、ありがとう・・・たすかむぐう－！」

わお！大胆！！

ラウラは一夏の唇を奪つた

「あらあら 一夏つたら流石（エクセレン風）」

「お、お前を私の嫁にする!! 決定事項だ!  
異論は認めんからな

よ、嫁？婿じゃなくて？」

そでせがなのがくに

するとラウラは俺の方に近寄ってきた

「なんだ？」

貴方の事を兄上と呼ばせでくたさ！」

卷之三

まつた頭が痛くなつてきた・・・

「嫁と正式に婚儀を挙げれば貴方と家族という事になるからです！」

!

「ああなるほど・・・後兄上は堅苦しこから兄さんで良いござ  
「おこおい納得するなつて・・・」

突つ込みを入れるアクセル

第1回 やんと鈴ちゃん何故かセリシアも参加して一夏を狙う

俺たちはノートにでかでかと

「いつぺん死んどけ、こん天然一級フラグ建築士が」

と書いて見せた

「う、裏切ったなあああ！！！僕の気持ちを裏切ったんだあああ！」

「オフコース！」

「Jの田一夏の断末魔が響いたのは言つまでもあるまい。」

## 新章予告

「時が来た」

「復讐と」

「我らの願い」

「……叶いし時が」「

「ついに来たね」

行動の時

「俺達の準備がようやく整つたぜ」

始まる戦いの予感

「お前の仇は……俺と一夏で討つ……」

そして……終わりを告げる命

憎しみと懲悪と二つが交わりし時 恐怖の鐘が  
鳴り響く……

「なんで……なんでこんな……」

「一夏ああ……」

「さよなら、僕の……×××」

終わりが迫る関係

「ここから先は通行禁止だ、これがな！」

「通してくださーーー！」

「アーティスト」

「なら・・・俺を殺して行けえ！！！」

命を欲する男

「……お前のお前専用機だ、  
×××」

「・・・ああ俺達は一緒だ・・・」

## 愛する者

「おい・・・父さん・・母さん・・・兄さん・・・姉さん・・・  
皆・・・わあああああああ――――――――――」

## 家族を奪われる苦しみ痛み

「貴女は・・・僕が相手をする・・・」

「一夏……私とお前は戦わなくてはいけないのか……？」

「ああ……始めよつよ……それが僕の……けじめだああー！」

!

絶対に譲れないけじめ

「なにこの申込みがどうしたがいいのだ？」

「下らん事で差別されるものの気持ちが分かるか？」

「俺達は下らん世界を正常な世界へと戻す」

「それが俺達の・・・戦争だああ！――！」

始まる戦い

「さあ行くぞ

「な」

ISI

織斑  
一夏と千冬の兄

新  
章

復讐と憎悪の中で

## キャラ設定

希望	恭介
年齢	23
身長	209cm
体重	89?
容姿	オッドアイのキョウウスケ・ナンブ
今作の主人公	元織斑 千冬の兄
白騎士事件をきっかけに織斑 千冬 篠ノ之	束激しく嫌悪、憎んでいる
以前は千冬、束と良好な関係を築いていた	
白騎士事件の被害者であるアクセル、弟の一夏と共に復讐を誓う	
一夏と同じくISを動かせる事ができ自らIS	
ライン・ヴァイスリッター アルトアイゼン・リーゼを開発した	
アルトアイゼン・リーゼの所有者	
希望	一夏
年齢	17
身長	197cm
体重	75?

今作のもう一人の主人公

恭介同様に千冬、束を激しく憎んでいる

白騎士事件及び誘拐事件において織斑 千冬に外傷を負わされる  
誘拐においては片目が失明にするが恭介の親友の親の手術により  
光を取り戻す

白騎士事件においては腕を切断しなければならない怪我を負うが  
恭介の治療によって切斷せずにすむ

恭介の力になりたいと恭介の開発したIS ライン・ヴァイスリッ  
ターの所有者となる

アクセル・アルマー

年齢 23

身長 209cm

体重 82?

今作の準主人公

白騎士事件で肉親全てを失い天涯孤独の身となる

千冬の兄である恭介に戦いを挑むが共に目的を共にする仲間と気付き  
行動を共にする

IS ソウルゲインの所有者

体術だけでは3人の中で屈指の実力を誇る

厳しいよ・・・お兄ちゃん・・・

ハロ、一夏です  
え、僕は今お兄ちゃんに首根っこ掴まれて引きずられます「笑い」  
・・・って笑えるかああ！――！――！  
だって訓練時のお兄ちゃん恐いのなんのつて！――！――！  
なんですか？Sですか？サディストですか？つて感じに恐いんだも  
の！

「ほー一夏・・・お前そんな事思つてたのか・・・」  
「！？？そそそそんなわけないじゃん・・・〔汗〕」

「夏」

- 10 -

詩經卷之二

「一やああああああああああああああ！」

あんたは血も涙もないのかああああ！！！！！！！！！！？？？？？

「ニコツ二十セットだ  
〔黒黒笑い〕」

「さあ、逝こうね、たつぱりシゴいて・・・相手してあげるからね

L

「今シテハアヒト言つたよ？言つたよ！？」

ウ・ル・サ・イ  
タ・マ・れ

言わせてもうひつ・・・セリシアは・・・某人造人間アニメの作戦部長か！？

恭介だ

さきほど一夏に特訓をしていた  
ヴァイスのスラスター出力を25%にしての回避訓練だ  
良いストレス解消・・・汗をかいた・・・  
そして今は屋上で昼食

「うう・・・やっと」飯だ・・・  
「い、一夏！？何でそんなボロボロなんだ！？」  
「嫁！？何があつた！？襲撃か！？」  
「い、いつたいなにが！！」  
「嫌なんでも・・・と、とにかく」飯を・・・  
「はい！」

鈴ちゃんが酢豚の入ったタッパーを出した  
そして一夏食べる

「あ！これ美味しい！」  
「でしょ！」  
「恭介さん、サンドイッチの味を見てくださいませんか？」

セリシアがサンドイッチの入ったバスケットを差し出してくる

「ああ貰おう」

一つ口に運ぶ

「うぐう……」

な、なんだつこれは……  
なぜこれほどまで……不味い……  
何故……山葵が入っている……  
カレーの辛さも入っている……  
卵もほぼ生ではないか……

「〔お、お兄ちゃん?〕」

「〔・・・〕」

「〔ま、まさか……不味いの?〕」

「〔ああ……あいつの始めて料理並に不味い……〕」

「〔え!?!?―?だつてサンドイッチでしょ!?!?〕」

「〔だが……正直に云つ事はできない……〕」ああ……美味い……

「〔本当ですか!?沢山ありますので全部食べてくれださいねー〕」

「〔あ、ああ……〕」

「〔死なないでよ……〕」

俺は耐えがたい苦痛食を食べきった  
俺の顔は灰色……

「う、美味かつたぞ……ではつぎは俺の弁当を食べてみて……  
くれ……」

バダン――――――

そこから先は……皆様の「」想像にお任せ致します

カフエ

ハロ～一夏だよ  
つてか眠い・・・休日の6時の日が覚めちゃった・・・  
ん？なんだか暖かな感触が・・・  
そこには裸のラウラがいた

「・・・・え！？！？！？！？！？！？」

・・・その頃の恭介は・・・

「ZZZ...」

絶賛睡眠中  
・  
・  
・

・・・元々！？！？！？！？！？！？

「…」なれども、

俺は起き上がり隣の一夏の部屋に向かいドアを叩く  
すこしして一夏が出てきた

「おい・・・煩いぞ」  
「ごめん！大変な事があつて！」  
「ふむ・・・嫁よいきなり押し込めるとは・・・屬に言ひのミプレ  
イと言つ奴か？」

そこには何とシーツを巻いたラウラがいました



因みに見た目は遊号だ  
ヘルメットを被り走らせる  
言つておぐが

『おい・・・デュエルしろ』 はまだできんぞ  
やつてみたいがな・・・  
俺のお気に入りのカフェの駐輪場にバイクを止める  
そして入る

カラソカラソツ

カウンターの席に腰を下ろす

「恭君久しいね」

マスターがカップを拭きながら聞いてくる

「そうですねマスターお変わりはないですか？」  
「そうだね、娘が高校に入った事ぐらいかね」「  
「そうですか・・・ではいつものお願いします」  
「あいよ」

俺がオーダーしたのはブラックコーヒーだ  
こここのマスターの淹れるコーヒーは格別なのだ  
俺は熱々のコーヒーを喉に流し込む

・・・美味い・・・

するとカフェに新たに客が来た  
俺が一番会いたくなかった奴だ

織班 千冬

俺の隣の席に座る

俺は構わずコーヒーを飲む

「マスターお代りを頼む

「あいよ、そうそう聞いたかい？」

「なにがですか？」

「恭君、噂だがね君達ＩＳ学園に通つてゐる男子に自社の装備を使つてもらつて

宣伝紛いの事をしてほしいつて噂があるんだよ」

「随分とウザつたいですね大丈夫ですよ断りますしそれでもしつこく来たら

・・・一刀両断しますから

「相変わらずだね

そつこつてお代りをくれるマスター

・・・恭兄・・・」

「言つたばずだお前との兄妹の縁は切つたとな・・・」

「でも・・・私は・・・」

・・・一つ忠告しておいてやる

俺達はまもなく行動を起こす

「！？それって一体！？」

一気にコーヒーを飲み干す

「それじゃあマスターお代りに置いておきます  
多かつたらとつといてください

「あいよまいどあり

俺はカフェを出てバイクに乗り走り去つた

これから始まるんだ・・・

俺の・・・いや

俺と一夏とアクセル達の復讐劇が・・・

## 同室者は代表候補生 新たな仲間

あ～俺達は臨海学校に向かっている最中だ

が俺と一夏、アクセルはバスには乗らずバイクで移動している  
アクセルのバイクはソウルゲインのような青のベースのバイク  
一夏は俺の後ろに乗っている

発案は一夏幾ら他の人がいるとは言え少しでも千冬がいる空間に居  
たくないらしい

なら教室ではどうなんだ・・・

「一夏、アクセル・・・おそらくこれであいつらと決別すること  
なるぞ」

「よつやくか

「ああ・・・レモンとヴィンデルから連絡かきた」

「よつやくだね・・・」

「ああ・・・復讐の・・・始まりだ・・・」

「恭介、レモンは何か言つていたか?」

「・・・もう少しで会える・・・待つていてつとな

「そうか・・・//／」

アクセルは顔を赤らめる

そうアクセルとレモンは付き合つている

といつても結婚間近だ

来年の6月に式を上げる

俺と一夏も出席する予定だ

そして臨海学校でお世話になる旅館に着いた

俺はさつそく自分の部屋の番号を山田先生に聞いた

一夏は同室の筹ちゃん

アクセルは山田先生と一緒にここ  
俺はと言つと・・・

「うるさい・・・」

扉を開け部屋に入る  
窓からは海が見える  
いい物件だ・・・

「そういうえば・・・アイツと始めてデートして来たのは・・・海だ  
ったな・・・」

ペンダントを開き写真を見る

「もうすぐだよ・・・お前が望んだ世界・・・俺が望んだ世界・・・  
一夏が望んだ世界・・・  
アクセルが望んだ世界・・・それを邪魔する奴には・・・どんな者  
であるうと・・・死あるのみ・・・!」

一旦外に出る

廊下を歩きたの途中で

「あ・・・・ペンダント・・・忘れた・・・」

俺は部屋に足を向けた

「あいへー!のペンダントは・・・」

その頃・・・部屋では・・・

「なぜ・・・私の部屋に」の様なペンダントが？」

そう・・・恭介はある人と相部屋・・・セリシア・オルコットと・・・

「これは・・・」

ペンドントが開きかかっている事に気づき開いてみると・・・

「これは・・・」

そこには恭介の腕に腕を絡ませ一夏の頭に手を置き笑顔でいる女性  
その写真の恭介は笑みを浮かべ

一夏の肩に手を乗せている

一夏は満面の笑みを浮かべている

「こ、この方は・・・いつたい・・・」「  
たしか・・・こ・・・こ・・・に・・・」

俺が戻った時にはセリシアの手によつてペンドントは開かれていた

「セ・・・セリ・・・シア・・・」  
「きょ・・・恭介・・・さん・・・なぜここ・・・？」  
「此所は・・・俺の部屋でもあるからな・・・」  
「え！？では私と相部屋！？」  
「そういう事だ・・・それよりそれは俺のだ」  
「あ！・・・す、すみません！？」

セリシアは慌てて俺にペンドントを渡した

俺はペンドントを見る

「見ただろう？」の写真を……

「は、はい……開きかかっていたもので……」

「そうか……気になるだろう？誰なのか……」

「は、はい……」

「……俺が……一夏と鈴ちゃんの戦いの後でお前たちは一夏から話しかけていたな……」

「コイツは……俺の……大切な人の一人だ……」

「大切……」

二人の間には重苦しい空気が漂う

「ああ……俺とアイツは昔からの付き合いでな……  
アイツも……お前と似た雰囲気を持つてる……」

「わ、私と……ですか……？」

「ああ……優しく、暖かで……俺はアイツのそばにいるだけで……心が安らいだ……」

氣分がよかつた……俺は……アイツのそばに居たかった……

「……」

「だが……白騎士と束は……それを奪つた……俺と一夏の目の前で……」

「恭介さん……私は……それほど大切な方との思い出の物を……」

「……」

セリシアは泣き出してしまつ

恭介は優しくセリシアを抱きしめた

「！？！？！」

「お前が……それほど泣く必要はない……だが俺のために泣い

てくれて・・・ありがとう

「恭介さつん！！私！セリシア・オルコットは！貴方の事が・・・」

／＼＼＼＼＼＼＼＼

「・・・」

「こんな場面でなければ・・・言えない・・・臆病な私は・・・貴方の事が愛おしいです／＼＼＼＼＼＼＼＼

貴方の事が・・・好きです！！！」

### 突然の告白

「・・・セリシア・・・お前の気持ちは嬉しい・・・だが俺の・・・俺達の目的は・・・復讐だ・・・

世界中を敵に回す事になるぞ・・・お前の祖国も・・・

「構いません！私は・・・貴方のお側に・・・いたいのです！！！」

「ありがとう・・・」

俺に・・・いや俺達に新しい仲間ができた  
イギリスの代表候補生セシリリア・オルコット  
彼女はアイツに似た物を持つていて

だからアレを渡すつもりだ・・・

俺のこの世で家族以外で愛したたつた一人のために作り上げた機体  
アンジュルグ・・・それか・・・ヴァルオーガ

同室者は代表候補生 新たな仲間（後書き）

セリシアと恋人になつたわけではございません

## 怒りを抑える3人

さてセリシアが仲間になつた  
総勢6名か

正確に言えばレモンが作ったA.I.システムとかその他色々有るから

6名ではないけど

とりあえず今は私服でビーチに向かう

上半身にはアクセルとの戦いで付いた傷がある

だから水着は着ない

着るとしてもウェットスーツだ

荒れる嵐より 次元さえ越えてゆける~お前~とな~

おっと俺の着うたが流れている

・・・ヴィンデルからか

ピッ

「なんだヴィンデル?」

『おお恭介、1つ気になる情報が入ってきたからな教えておこうと思つてな』

「どんな?』

『アメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用I.S.、銀の福音を知つてるか?』

「あああれか』

『そのデータを検証した所暴走の可能性が出て来てな、しかもシユミレートした所

暴走が起きるのはおそらく迎え行く時だ』

「そうか・・・ってかハッキングしたか?』

『ああやつたのはレモンだがな』

『やっぱし・・・それと仲間が増えた』

『ほづ?』

「イギリスの代表候補生、セリシア・オルコットだ  
『ではともに合流するのだな?』

「ああ」

『わかつたではまた会おう』

「ああ全ては目的の為に」

ピッ

電話を切る

・・・いよいよだな・・・

海岸に出ると・・・

「チエ～ストオオオ～！」

一夏がビーチバレーでスマッシュを決めていた

「や、りせるか！これがな！」

アクセルは回転レシーブで拾う

「はああ・・・一夏君・・・アクセル君・・・いい体つき・・・

「あ・・鼻血が・・・」

「はあはあ・・・あのままベットに押し倒して・・・」

・・・一人危ないな

試合は終わり二人は俺に気づいた

「来てたんだ」

「・・・ヴィンデルから連絡が来た」

「！」「！」

「いよいよだ」

「ああ」

うん

「あ～！～なんで恭介君水着じやないの～！～」

1人の女子が言つてきた

「・・・いいだろ別に・・・泳ぐ気がないだけだ」

なぜか他の女子も落胆する

まあこの後は夕食でセリシアとシャルがわさびをそのままパクリで悶絶しなれない正座で足が痺れるという事にそして夕食後はセリシアに合流のことを話した

今日はEISの各種装備運用とデータの収集的な事をすることになった  
がそんな時に・・・

「うへへへうやああああああん……………」

篠ノ之 束だ

俺達は怒りに包まれた

仇とする奴が今

「…………怒りが…………溢れて…………来るよ…………」

「奇遇だな・・・俺は憎悪され出て來た・・・」

「おはつこうナジ  
ヨーハルト用語ノリ

「わが二でぬけと……抑えきれる自信ないよ……」

「なら此所を離れる・・・行くぞ」

二人を連れその場を離れる

ここで暴走してしまいそうだったからだ

そして・・・ヴィンデルの言う通り銀の福音は暴走した

## 決別

俺達は銀の福音撃破のため海上を移動中

「ついついでもよ～すぐ終わるだろ?」

「ああ、バンカーか、玄武剛弾、Xモードで沈むな簡単に」

やつらが戻つてゐる間に見えてきた

「早く終わらせてよつぜ」

「ああ」

スラスターを全開しアクセルと一緒に夏が両サイドから押さえ込み  
バンカーを打ち込む

ダンーダンーダンーダンーダンーダンーそれだけで終わる・・・

「は、はやい・・・」

「兄上・・・」

「す、すこい・・・」

他の皆は呆けている

そして他のやつらは帰ろうとしたその時！――

突如目の前に紫の球体のようなものが現れた

「な、なんだこれは！？？」

「やつときたか」

「「「「え？」」」

そこにはツヴァイザーゲインを纏つたヴィンデル・マウザーと  
ヴァイスセイヴァーを纏つたアクセルの嫁 レモン・ブロウニング  
が居た

「なんだーお前たちはー？」

ラウラが武器を向ける

「おやおやこきなり武器を向けるとは…・・・

「なー！男ー！ー？」

「しつけがなつてないわね

簫が驚きの声をあげる

「さあ行こうか、3人とも・・・嫌4人だつたな」

「な、何の事なの・・・？」

シャルが疑問に思つ

「ああ、ようやくこんなかつたるい所からおさらばできるが  
「なにー？おいアクセル・アルマー！何を言つてこるー？..」

ソウルゲインはレモンの近くに陣取る

「ふう・・・やつと終わりか・・・この生活も・・・」

「一夏ー！ー！ー？」

鈴と簫が声をあげる

一夏はアクセルの隣に移動する

「・・・

「お、お兄ちゃんーー!?」

シャルは向こう側に行く恭介に声をかけるが恭介は構わずヴィンテルの隣に陣取る

そしてセシリ亞は恭介にぴたり隣に陣取る

「さあお別れの挨拶ぐらいしたらどうだ?」

「そんなもんはいらん」

「同じく

「わたくしもですね

「俺もだ」

「どういう事なんだ!一夏!ーー!」

「説明しなさいよ!」

「いつか言つたよね、篠ノ之 束と織斑 千冬のせいでつて話・・・

「何の話だ?」

シャルとラウラは首を傾げる

「・・・僕達の目的は・・・」

「「「「「織斑 千冬及び篠ノ之 束に対する肅清、抹殺及び世界の修正」」」」

「俺達はあの二人を殺すのが目的だ・・・」

「な・・・なんでも・・・千冬さんと姉さんを・・・」

「俺達に共通する事は・・・白騎士事件で身内を失っている・・・セシシアを除いてな・・・」

「「「!――!――!――!――!」」」

「アクセルは親族全員で集まっていた所を・・・レモンは兄を・・・

ヴィンデルは弟と妹を・・・そして俺と一夏はアイツを失った・・・

「で、でも！身内じゃないじゃないですか！！」

「俺とアイツは白騎士事件の1ヶ月後結婚する予定だつたんだよ  
「そ・・・そんなあ・・・」

鈴、簞の顔に悲しみが溢れ出る

「僕も・・・あの人と家族になれるのを楽しみにしてた・・・  
お兄ちゃんならあの人を幸せにできるし僕もそれで幸せだつた・・・  
そんな・・・細やかな願いは・・・あの2人の手で消え去つたんだ  
！」

ハウリング・ランチャーを構える

「僕が何をした！！何もしてないのに千冬に殴られ・家族の縁を切  
られた！！  
僕がどれだけの思いをして生きてきたか分かるか！？ただ復讐する  
ために  
ヴァイスを物にするためにどれだけ苦しんだか！？」

怒りを露にし憎しみを表に出す一夏

「止めてもいいってお兄ちゃんにも言われた・・・お前まで復讐と  
いう一文字を背負う  
必要はないって・・・でも僕は復讐を誓つた・・・僕はあの二人を・  
・殺す・・・」

バシュウ！！

E・モードで篝に当たるすれすれで放つ

「い、一夏・・・」

「『めんね篝・・・』でも君は僕達の復讐とは関係ないからね  
ではそろそろ行くとしようシステムX起動」

俺達の体は紫色の光に包まれた

「さよなら」

そしてそのまま消えた

そして転移したのは俺達の秘密地下基地  
地下600メートルという深い地点に建設した  
システムXを駆使し建設したのだ

「此所も久しいな

「あの・・・恭介さんここは・・・」

「此所は地下600メートルに位置する俺達の基地だ  
ここでは自給自足する為に食料プラント『クレイドル』  
空気循環システム『プラムレム』

エネルギー・プラント『エターナル』

その他にも訓練スペースに居住スペース、温泉もあるぞ」

「温泉・・・ですか?」

「温泉って言つのはね簡単に言えば大自然が作ったお風呂の事よ」

レモンが説明する

「へえ~」

「温泉にはね普通のお風呂とは違つて効能つて言つのが有るの」

「効能?」

「ああ、こここの温泉の場合は・・・神経痛、筋肉炎、関節炎、五十肩、運動麻痺

関節のこわばり、うちみ、冷え症、病後回復期、疲労回復、健康増進に・・・

後は・・・美肌効果だったかな?」

セシリアは俺の言葉に大きく反応した

「今! 美肌効果つておっしゃいました! ! ! ?」

詰め寄られる俺

「あ、ああ

「ほんとうですのね!! 私早く入りたいですの!! !

「案内するわ、ゆっくり浸かりなさい」

レモンはセシリアを温泉に連れて行った

「やはり年頃の女の子だな」

「・・・そうだな・・・」

「でもいいのかな・・・巻き込んでじゃって・・・」

「彼女本人は構わないと言っているそれを信じてあげよう」

「ああもしもの時はケリを付ければいい」

「さ、さらっとヤバい事言わないでよ・・・

「だが事実だ」

皆は俺を見る

「俺達はそういう世界に居るんだ・・・さて・・・時が来た」

「復讐と」

「我らの願い」

「「「叶いし時が」」

「ついに来たね」

「そうね」

いつの間にかレモンが戻つて来ていた  
鼓動を始める憎しみという名の獣  
その牙と爪はなにを傷つけるのか  
・  
・

## 決別（後書き）

ついに始動する恭介達の復讐劇

彼等の目には愛しき者を奪われた憎悪しか浮かんでいない  
セシリ亞も恭介のために全世界を敵に回す覚悟を決める  
一夏は不敵に笑い無造作にトリガーを引き的を撃ち抜く  
レモンはアクセルと運命を共する事を誓う  
ヴィンデルも仇と世界を正常な世界に導くため

闘争を燃やす

I S 学園では彼等に対抗するために準備をするが彼女等の心は  
深く傷つき彼等の元に向かいたいと望む  
物語は加速しスポーツとして染まったI S は兵器として  
牙を向く

## 己が道

I S 学園は慌しかつた

生徒である4人が消えその目的が

織斑 千冬及び篠ノ之 束に対する肅清、抹殺及び世界の修正  
この事は I S 学園が外部にはまだ漏らしていない  
この事を漏らしてどうなるのか検討が着くからだ  
おそらく討伐の為に I S 学園に命令がくる  
全世界がどう動くか解る事だ

「・・・山田君どうだ?」

「はい順調ですが・・・

「が?」

「・・・ラウラさん、鈴さん、シャルロットさん、篝さんは精神状態がかなり不安定で・・・」

「・・・しょうがないといえばしょうがないか・・・」

千冬は溜め息を吐き窓の外を見る

空には雲一つなく青空が広々と広がっていた  
が少女達の心は嵐に包まれた空だろう

「あの・・・織斑先生・・・」無理をなさないでくださいね?  
「解つているさ・・・」

千冬はその場を立ち去り自分の教職員の部屋に行きイスにもたれ掛かる

「恭兄い・・・」

恭兄は私を殺したがつていい・・・

恭兄の幸せを奪つたから・・・

私が・・・束を・・・止めていれば・・・

恭兄いい・・・私にもう一回笑いかけてよ・・・

一夏と一緒に帰つてきて・・・

私は・・・恭兄の事が・・・好きなんだから・・・

恭介はどうと・・・

「ぶわっくし！・・・」

「うわ！・！なんだよ風邪か？」

「恭介お前はまた夜な夜な訓練でもしていたのか？」

「いや・・・してないぞ・・・」

「では誰かが噂でもしてるので？」

「有り得るな・・・」

「とにかく中核であるお前は体調管理もしつかりしろ」

「解つた」

その頃のヒロインズ

一夏の部屋に集まり話をしていた

「ねえ・・・どうすればいいの・・・僕達・・・」

シャルが涙ながらに言つ

「でも気持ちは解らないでもないのよね」

「・・・嫁と兄上は・・・心に深い傷がある」

「一夏・・・」

篇はあの時からまるで魂が抜けてしまったような感じになってしま

つた

「 篠もこの調子だしねえ・・・」

「 ねえ・・・もう一回お兄ちゃんと一夏に会えたなら・・・どうする・・・?」

「 「 「 「 「

3人は口を閉じる

「 私は・・・」

ラウラが口を開く

「 嫁と兄上の側に着く」

「 「 「 !!」」

「 ほ、本気なの!!--?」

「 ・・・でも本当はどうしたいのか解らない・・・ただ・・・嫁と兄上に会いたいだけなのかもしない・・・」  
「 ・・・僕も・・・多分そうすると思う・・・」  
「 私は・・・祖国の人達を・・・裏切れないよ・・・」

鈴の言つてゐることは正しい

「 篠は・・・どうしたいの・・・?」

「 ・・・一夏の・・・?」

ブルルルッ ブルルルッ

突然篠の携帯が鳴る

篠は覚束無い手つきで携帯を取り通話ボタンを押す

「はい・・・」

『・・・・・・・ 篓? 一夏だけ? 』

「...? 一夏なのか!?!?」

篓がなによりも聞きたかった声

此所にいる3人は聞きたかった声

篓は皆に聞こえるようにスピーカーをONにする

『・・・・・あの時は、めん・・・撃つたりして・・・』

「そんな事は、い! 今何処に居る...?」

『聞いてどうするの?』

「嫁! 決まっている! 会いにいくのだ! !」

『ラウラ・・・言えない・・・』

『なんでなのよ! セシリアはそこそこいるんでしょう...?』

『・・・セシリアは確かに此所に居るよでもそれは覚悟を決めたからだよ』

「ど、どういう意味なの? 一夏?」

シャルが聞く

『僕達と行動を共にするそれは全世界を敵に回すって事・・・それだけの覚悟がある?』

「「「「それは・・・」」」

『・・・もしも・・・覚悟があるんだつたら・・・1週間後・・・』

学園近くのカフェ【ラウンジ】に午後4時に来て・・・

ブツッ! ブツッブツ

「・・・どうする?」

「・・・よく考えてからにじよつ・・・」

「覚悟……」

「……」

4人は思考の海に入り込んで行った

そして一夏は……

「……これでいいんだよね……」

何十という国を経由して電話したんだから

「一夏お前は何のつもりだ?」

後ろにはお兄ちゃんが居た

「……無駄に危険性がある事は控えろ言つたはずだ」

「でも……僕は……4人の本心が知りたいんだ!」

お兄ちゃんは一瞬にして接近し僕を胸元を掴み持ち上げた

「下らん……と言いたい所だが……一夏気持ちは解る  
だが篠ちゃんの事を思うなら止める」

「……? ななんで篠が出てくるんだよおお……………  
「ふつ」

お兄ちゃんは僕を下ろして頭に手を置いて撫でてくれた

「惚けるなお前が篠ちゃんに惹かれている事は知つている

「…………」

「どこが好きなんだ?」

「…………」

「うのが、はい東は俺がこいつある

「なんでよーーー?」

「仮にも第ちゃんの姉だそんな奴に武器を向けても無駄だ！」

「一夏」

「一夏……お前は自分は正直はない……俺たっていいまでせお前を守れるわけじゃないだ」

其の如きは、實に體化してゐるのである。

的に治療せんと治らんらしい

「じゃあ治療に専念してよー!! 死んじゃつたらどうするつもり!」

「一夏」

「僕にはもう家族はお兄ちゃんしか居ないんだよ！！」

「はかったよ……緊急時以外は治療に専念しよう」

よだてた！

## 恭介の思い

僕は射撃訓練場で銃を構え的に千冬を思い浮かべ  
その顔の中心部に打ち込んでいく

中央部に当たるといい笑みがこぼれてしまつた  
ドオン！ ドオン！ ドオン！ ドオン！ ドオン！

全ての銃弾は的命中した

「こんなもんかな？」

銃を片付け僕は訓練室を出て中央指令室に向かつた  
そこにはアクセルさんとレモンさんが居た

「よお一夏、訓練は終いか？」

「うんまあねセシリ亞は？」

「彼女ならアシュセイバーを使って訓練をしてるわ

「そう・・・でお兄ちゃんは？」

「恭介か？知らんな・・・レモン知ってるか？」

「恭介なら少し用があるって出て行つたわよ

「どこに？」

「さあ・・・でもお花を持ってたわよ  
「花？」

「あつ・・・お姉ちゃんのお墓に行つたんだ・・・

「一夏お前はいいのか？」

「うん・・・お姉ちゃんを失つて一番かなしんでたのはお兄ちゃん  
だし・・・」

「関係あるの？」

「・・・今は一人にしてあげたい・・・」

僕は指令室を出て自室に戻つて写真立てに入れてある写真を見る  
そこには・・・小さい僕を肩に乗せているお兄ちゃんにお姉ちゃん  
が抱きついている

皆笑顔だ・・・でもお兄ちゃんは心から笑う事はなくなつた・・・  
お姉ちゃんが死んでから・・・

所は変わりそこはとても見晴らしがよく辺りが一望できる  
そこに1つの墓があつた・・・

恭介が家族以外でたつた一人愛しあ互いに愛し合つた人の墓・・・  
恭介は珍しく黒のスーツを着用している  
その手には薔薇の花束が握られていた

「好きだつたよな薔薇の花・・・」

花を墓に供える

「・・・俺の国風の墓がいい・・・お前からその言葉を聞いた時は  
気が早いとしか思わなかつたが・・・」

線香に火を付け供える

「なあ・・・新しい仲間ができたよ・・・セシリシアって言つてな・・・  
・俺に力を貸してくれるってよ・・・  
お前と俺・・・そして一夏が望んだ世界は・・・俺と一夏そしてお  
前で幸せな家庭を築く事だつた・・・  
だがそれはたつた2人の手によつて消えた・・・が  
ラミア・・・愛してるよ・・・今まで・・・これからも・・・」

俺はその場を後にした・・・

その時指にはめていたラミアと絆の証である指輪が光つた気がした

『私は・・・そばに・・・いますのことは・・・  
私も・・・愛してる・・・恭介』  
「・・・気のせいいか・・・」

恭介はバイクに乗りその場を去った

# 基地での一日

ピピピバシ！ボッシュ！

田原のやかましい音を口を潤して

俺事赤介に起きた

井伊早朝のト

## その後朝食の支度

口承に伝せてもいいか」れば禮儀にならずしまい止められない

セシリアもいるからな

卷之三

「アクセル」

「あら、私が作った方がよかっただからいら？」

卷之六

アグゼルは糸を赤く染めた

「朝からラブラブだな」

あら有難い

卷之三

「もひ・・・朝から部屋が暑くなつちやてるよ・・・」

一夏が呆れたように言つ

「そういえばヴィンデルはどうした？」

「ああヴィンデルなら部屋で寝てるが、徹夜してたからな

「そりなんですか？」

「おおセシリ亞も来たか、では朝ご飯にしよう」

「おっしゃああああ！！！！！お兄ちゃんの朝ごはん最高おおお  
！！！」

「騒ぎな一夏、まあ超絶美味しい事は認めるがな

「そんなに美味しいんですか？」

「ああ、5つ星レストラン顔負けだ」

「煽てるなさあご飯にしよう」

俺が作ったご飯を皆は食べ始めた

「はいアクセル あ～ん」

「お、おいレモン・・・恥ずかしいぞ／＼／＼／＼／＼

「う～ん 美味い！！！！！」

「ほ、本当に美味しいです」

「有難う」

『氣づくともう皆食べ終わっていた

「じゃあ恭介、治療受けたね」

「分かつた分かつた言われなくでも分かつてる」

「え！？恭介さんどこかお悪いんですか！？」

「ああ、白騎士事件の時のミサイルの破片が体内に入つてな  
破片は取り除いたのだがな、その破片の影響で病気になつてな  
それがまたやつかいでな」

「やつかいとは？」

「それはね戦闘なんかで体に衝撃やダメージを受けると生命力が落  
ちて

体力も一時的に低下して酷い時には死んでしまうかも知れない」

「ええ……？ キョ、恭介さん……大丈夫なんですか……？」

セリシアに詰め寄られる

「あ、ああ大丈夫だ……まあ直すにはアルトに乗らざる一年は治療を受けなければ

完治しないんだ」

「では……急いで治療を……医務室でいいんですね……？」レモンさん……」

「ええ」

「では……行きましょう……！」

セシリ亞は俺の腕を掴み強引に引っ張る

「お、おい……！」

「わあわあ……お早く……！」

恭介はセシリ亞に連れていかれた

「なんか世話女房つて感じになつてきたわね」

「ああ」

「あのまま幸せになれるのかなあ？ お兄ちゃん治るの？」

「ええ、アルトを開拓しなければ」

「……だがアルトは今作戦の中核を担つているぞ」

「ええ……私も新薬の完成を急ぐわ」

「ああ……俺も手伝おつ」

アクセルとレモンは新薬の開発に向かつた

「……僕は……お兄ちゃんになつてみせる

安心して治療に専念出来るよう・・・」

一夏は訓練スペースへと足を進めるのであった

## 始まる戦い　一夏対等　望んだ未来と壊れた未来　前編

「・・・システムオールグリーン  
テスラドライブ出力89% サイゲルト粒子正常・・・  
プラズマ・ジェネレーター出力97%  
高効率反動推進装置システムグリーン・・・」

一夏はヴァイスを展開しシステムをチェックする

『一夏・・・行くのか?』  
「・・・行くさお兄ちゃん・・・僕がIS学園に攻撃を仕掛ける」  
『・・・ではやつて見せろその力をスポーツに染まりきった下衆供を  
叩きのめせ・・・』  
「やるひ・・・ISスポーツ適合ミニシターレベル2まで開放  
希望 一夏・・・いや・・・ライン・ヴァイスリッター出る!!--!  
!』

ヴァイスはカタパルトから打ち出される  
海から出たヴァイスは輝き悪魔の翼を広げた

「・・・待つていろよ・・・」

速度を上げIS学園に向かつた

「行かせて良かつたのか?」

司令室の椅子に凭れ掛かる俺に、ヴィンデルが話しかけてきた

「いいんだ・・・俺の命は残り短いかもしない・・・

「アイツは俺の気持ちを代弁してくれるのさ・・・・

「治療すれば治れるのよ?」

「いや・・・いいんだもつ・・・・アイツに続き俺達も出るぞ

「・・・いよいよね

「まずはEIS学園を手始めに全ての国に攻撃を開始する・・・・

そして・・・一夏は・・・EIS学園の上空に到着していた

「君達には・・・篠、鈴、シャル、ラウラ・・・僕達と共に歩くチャンスをあげた・・・でも君達はそれを無視した・・・僕は・・・俺は・・・お前達が・・・邪魔をするなら・・・殺す・・・・!」  
ステルスシステム解除・・・・

ステルスが解除されヴァイスの姿が露になる

「ミッション・・・スタート・・・!」

ハウリング・ランチャーのEモードが火を吹きEIS学園に命中する  
一夏は更に連射を開始した

「・・・ふつ」

連射を続けているとEISが此方に向かってきた

「一夏ああーーー!」

・・・

それは僕が好きだった人・・・篠だった

「・・・篠か・・・」

「一夏！…なんでI.S学園を攻撃するんだ…！」

怪我人だつて出たんだぞ…？？」

「…だからどうした…？」

「なに…？」

「…愚らぬ玩具に染まつた愚か者共が…。  
一瞬でも…我が兄と仲間以外の者を信じよつとした俺が愚かだ  
つた…？」

「一夏…恭介お兄さんを止めてくれ…！」

このままではあの人を…！撃たなければならなくなる…？…？」

「それがお前達の選んだ道だらう…俺の誘いにも来ず踏みにじ  
つた者よ」

「そ、それは…？」

筈は顔を背ける

が一夏は構わず続ける

「筈…お前が俺の邪魔をするなら…？」

日本刀を抜き筈に向ける

「お前を殺す…？」

「い、いち…か…？」

『筈ちゃん…何してや…やらなきゃ殺されるよ…？』

下の方で束がいた

「…我が姉の仇…我が兄の…ノゾミ…」

「い、一夏…？どうしたんだ…？」

「…任務了解…I.S学園に現存するI.Sの…全破壊…」

・

## 始まる戦い 望んだ未来と壊れた未来 後編

僕は復讐の道を迷わずに進んだ  
正直な事を言うと僕は戦いたくなかった  
でも怒りと憎悪が僕を戦いに駆り立てた  
恐いの？

そうだそなうなのかもしれない  
僕がそうあるように望んだ

そのはずだ・・・

でも恐い、とても恐い

でも恐いなら覚悟を決めよう

そうだ・・・僕は・・・ライン・ヴァイスリッターの所有者なんだ・

・・・  
ヴァイスの所持者・・・戦うよ

・・・でも僕の目の前には好きな人がいる

僕の目的は好きだった人の仇討ち

・・・じゃあ僕はどうしたらいいの・・・？

でも・・・僕はお兄ちゃんの剣となり牙となる・・・

でもどうして・・・心が・・・痛いよ・・・

・・・篇・・・

バシュン！－バシュン！－

IS学園・・・IS操縦者育成用の特殊国立高等学校  
が今そこは無残な姿だった

壁は崩れ落ち彼方此方から煙が上がっている  
そして上空では・・・白い閃光と赤い閃光が混じり合っていた

「・・・俺の邪魔をするな・・・」

一閃！柄から抜かれた日本刀は輝きを放ちながら赤色のエスに振り下ろされた

「クツー！」

ギリギリの所で受け止める

が刀から手を放しハウリング・ランチャーを構え無造作にトリガーを引いた

放たれた光は真っ直ぐに箒を捉えた

片手をランチャーから放し刀を握り切りつける

「うわああーー！」

そのまま箒は地へと落ちて行つた

地面と衝突しそうな所で織斑 千冬によつて助けられたが  
一夏は再びランチャーを握り締め無情の追撃を加える  
がこれは千冬に対しての物であつた

乱射はしているがまるで箒から千冬を引き離すかのような射撃だった  
その時紫の球体のようなものが現れる

「あ、あれはーー！」

「あ、あの時と同じーー！」

「つてことはーー！」

見たことのあるラウラ、鈴、シャルロットは声をあげる  
そして現れたのは

阿修羅ツヴァイサー・ゲイン ヴィンデル・マウザー  
蹂躪閃光ヴァイスセイバー レモン・ブロウニング  
蒼い戦神ソウルゲイン アクセル・アルマー  
黒き女神アンジュルグ・ノワール セシリア・オルコット

赤い戦神アルトアイゼン・リーゼ 希望 恭介

そして一夏は

「よく聞けよ・・・愚らない者共・・・」

「貴様等は此処で朽ち果てろ・・・」

「我等に刃向かおうといつのなら骨まで粉碎する」

「貴女達は此処で終わりね」

「俺達に戦うとするなら今此処で叩きのめす・・・これがな・・・」

「まあ諦めになる事ですね」

全員からは凄まじいまでの殺気が感じられる

殆どの者はその殺氣から泣きだし逃げ出しが戦うという選択手を選んだ愚かな者がいる

凰 鈴音 シャルル・デュノア ラウラ・ボーデヴィイッヒ  
織斑 千冬 篠ノ之 束 山田 山田 真耶 だつた

それぞれISを展開し恭介達に向かう

千冬は恭介に向かおうとするが一夏が立ちはだかる

「貴女は・・・僕が相手をする・・・」

「一夏・・・私とお前は戦わなくてはいけないのか・・・?」

「さあ・・・始めよ!よ・・・それが僕の・・・けじめだああ!!」

!」

弟と姉

その一つがぶつかり合う

一気に上昇し速度が上がり

二筋の光がぶつかり合つているようにしか見えない

「織斑先生！」「嫁！」

鈴とシャルは追いかけよつとする

がソウルゲインとヴァイスセイヴァーによつて止められる

「決着をつけよつて言つのに野暮な事するのね」

「ここから先は通行禁止だ、これがな！」

「通してください！？」

「どいてよ！？」

「なら・・・俺を殺して行けえ！？」

ソウルゲインとヴァイスセイヴァーは一人に組み付き地面に流星落下「シユーティング・フォール」を行つ

「シャル！鈴！」

ラウラが援護を行おうと降下しようとするがアンジュルグ・ノワールをまとつたセシリアの手によつて止められる

「貴様！邪魔をするな！？」

「そろはいきませんわ」

「セシリア・・・貴様祖国を敵に回して庇うするつもりだ！？」

「私は私の好きなお方の進む道をお助けするだけです

その道のために・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ

あなたのお相手は私がします！？」

アンジュルグは黒き天使の翼を広げラウラと共に上空に登つっていく  
ヴィンデルは山田 真耶と戦闘を始める

「きょー君！…よべも篠ちゃんを…」

「実行犯は一夏だ、それに奴は篠ちゃんを殺す気はない  
が…俺は貴様を殺す…お前は…俺の婚約者を…  
俺の家族を…殺した…」

「ラニアちゃんの事?」

「…なぜ貴様がラニアの名を…」

「知らないとも思ったの?あの娘と日本に来る時合せで白騎士事件を

起こしたんだもの」

「何い!…」

「そもそも何のためにエリ何て物を作ったと思つの?…

「…殺す…殺す…」

発動！ヴァイスの単一使用能力「ワンオフ・アビリティ」まで行かない

上空500メートル付近

そこでは火花が散つていた

ガキン！－ジヤギン！－

ライン・ヴァイスリッターの刀と暮桜の雪片がぶつかり合つ

「ふうんなかなかの剣捌き」

「くつ一夏・・・」

「黙れ！」

一夏は力を込め暮桜を弾き飛ばす

「俺は・・・この時を待つっていたんだよ・・・」

「一夏！戻つてきてくれ－！また一緒に暮らそつ－－」

「良くそんな事が言えるよな・・・」

刀を柄に戻しランチャーを握る

「一夏！－－！」

「・・・」

僕の頭には昔の記憶が蘇ってきた

・・・

「ほら起きろ一夏朝だぞ」

「うーん・・・－ヤイ・・・」

「朝だぞ～」

眠いよ。

「よし朝飯抜きな」

「ニサムアタマ」

L

そう言つて飛び上がり起きた僕

お兄ちの、木に木札を見て、ニヤニヤ笑つてゐる

「むかし」

「頬を膨らますな」

泣く・・・? 一

濟まん俺が悪かつた

たが、たゞ運んでくれたさしは、や

作川道の風景

「...舞記カドニ立、」

つと言ひつつ僕を運んでくれる

でも何故かお姫様抱つこなんで？

そのままりビング到着

そこにお兄ちゃんが作った料理を盛り付けるたにしてしま

二冬女たし

一 夏・・・な世恭敬に抱っこされている・・・

ニヤム・ニヤム 氣分がはや

「恭兄私毛」

そう言って千冬姉はお兄ちゃんに抱きついてきた

僕を左腕に乗せ千冬姉を右腕に

僕と千冬姉はお兄ちゃんの首に手を回している

「すうへはあゝ・・・恭兄／＼＼＼＼＼＼＼＼

一顔が真っ赤にだにや？」

熱が？

「ハジニシル」

「おもてなし」一版

木乃木乃木食木食  
力ノ力ノ力ノ

あの頃は良かったな・・・おつとこんな過去はどうでも良い  
そうこえばこの時僕の口癖にやっだつたな・・・  
今言おう・・・ネーハリヤセナヒト言えば良かった  
いやー

発動！ヴァイスの単一使用能力「ワンオフ・アビリティ」！（前書き）

Gガン要素あり？

発動！ヴァイスの単一使用能力「ワンオフ・アビリティ」！

・・・確かに縁を切られる前そんな事があつたな・・・  
でも僕にとつてそんな事はどうでも良い・・・  
お兄ちゃんは結婚直前でお姉ちゃんを失つた・・・  
僕だつて・・・人を殺す覚悟ぐらい・・・できてるーーー

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ପରିଚୟ - . . . .

夏は咆哮を上げヴァイスは輝かしい光を放つ

「い、一夏！？」

い  
ー！おおおおおおおお！人機いいいい！！！しおおおあいい

輝きが收まりヴァイスは輝かなオーラを纏い  
一夏の顔がヴァイスの顔と融合した

「な！？」

「これがライン・ヴァイスリッター「ワンオフ」・アビリティ  
ファースト・エディション 人機一体！！

自分自身と融合する事により性能を格段に向上させたシステムがそれと引換にダメージがリアルに装着者に伝わる「

ランチャーを強く握りEモードを超高速で移動しながら乱射を開始今までとは比べ物にならないスピードだ  
千冬は一旦距離を取り回避行動をとる

超連射をされながら一瞬で僅かな隙間を見付けて避ける

「流石だなブリュンヒルデ」

「一夏……」

「なら見せてやるつ……お兄ちゃん以外には使った事ないんだけどな……」

ワンオフ・アビリティ・セカンド・ヒートイシヨン……」

ヴァイスの翼から光の粒子が溢れ出了た  
それは此所ら一帯を包み込んだ

「！」、これは……」

「見せてやるつ……セカンド・ヒートイシヨン……」

千冬の真つ正面にEモードを撃つが驚きの事が起きた  
ビームが直角に曲がった

そのままビームは湾曲を繰り返し千冬に直撃した

「！」、これは……」

「……ヴァイスとアルト……」の一機のワンオフ・アビリティ  
進化し続ける……まさに常識の超越……セカンド・ヒートイシヨン……

『復讐者の魂』<sup>ローベンジャー・ソウル</sup>……

千冬はそのままゆうべつと落ちていく

「い、一夏……」

「……」

無造作にXモードに移行し銃口を千冬に向ける

エネルギーが充填され銃口は光を放つ

「・・・うう・・・」

「い、いちか・・・」

一夏はトリガーを引いた

放された巨大なエネルギーは湾曲し跳ね返りつつ千冬を捕られた  
・・・が千冬にはヒットしていなかつた  
僅かに頬を震めただけだった

「な・・・何でだよ・・・この俺が・・・外した・・・?  
このアビリティを使って・・・?・・・どうなつてゐるだ・・・?  
「一夏ああああ・・・」

千冬の目は潤んでいる

優しさと慈愛の目で一夏を見つめる

それは恭介の婚約者、自分が千冬に縁を切られ  
新たに姉と呼んだラミアがいつも自分を見てくれる時の目だった

「そんなん目で俺を見るなあああ――――――!

お姉ちゃんと同じ目をおおおするなあああ――――――!」

一夏の目には千冬にラミアの面影が重なつていた  
自分を兄と同じじぐりに愛してくれたラミアの面影を・・・

「俺は・・・俺は・・・僕はあああ・・・どうしたらいいの・・・?  
どうしたら・・・おにいちやあああん・・・?・?  
なんで・・・お姉ちゃんに見えるんだよおおおおお・・・」

一夏は涙を流し粒子を出しながら兄の元に向かつた

蒼き戦神 踵躡閃光 阿修羅

ショーティング・フォール  
流星旗下で地面に叩きつけられた

鈴とシャルは膝を着き漸く立ち上った

「うう・・・」

「いたたたた・・・何すんのよ！――」

鈴はアクセルに叫ぶ

「アイツの邪魔をさせないためだ」

「一夏はね・・・苦しんでるの・・・」

「ぐ、苦しんでる？」

「どういう事？？」

シャルと鈴は聞きたそうな声を上げる

「アイツはな・・・血の繋がつた大好きだった姉に縁を切られて  
酷く悲しんでた・・・がそれはいつしか恨みと憎悪に変換されてい  
つた・・・」

「まだ未来が有る少年が闇に囚われていった・・・恭介もそう・・・  
お互に愛し合い結婚さえも手に届くところまで來ていたのよ・・・  
大好きだった人に先崇れた者の気持ちが・・・解る？」

これから幸せに穏やかに暮らしあつとしていたのに・・・あの二人の  
せいで

そんな清かな願いは断たれたのよ

「・・・でもだからって・・・そんな復讐に何の意味があるの！？」

シャルが大声を上げる

「復讐で人を殺してそれでまた新たな憎しみを作る気なの！？」  
それ二河の意味があるの！？

それに何の意味があるの！？

「そうよーー！ アイツに入殺しの業を背負わせる気なのーー？』

「ならお前達はアイツをどうしたい? アイツを元のアイツに

第三回

「もう手遅れよあの子はもう復讐と憎悪の中で生きてきた  
もう元の優しいあの子には光もう戻れないわ」

ソウルゲインの両腕に光が灯る

「俺達とアイツ等の思いは同じ

あの一人の死だ！！！いくぞ！レモン！」

ええ」れを終わらせて結婚式に出席しなう」

「何を顔を赤くしているアクセル」

ヴィンデルがアクセルの隣に立つた

「おいでインデル、山田先生と戦つていたんじやなかつたのか？」

「先程終わつた、口ほどにもない」

「やはりか

「そこで見ていろ」

「ああ」

ヴィンデルはその場で腕を組む  
アクセルは腕を回転させる

「いけえ！ソードブレイカー！」

二人揃つてソードブレイカーを展開し一人に撃ち掛ける  
二人を四方八方から撃ち掛ける

「うわわわ！－！」

「な、何のこれ！？」

「ソウルゲイン！俺に力を貸せ－いくぞお－－！」

「あらあら燥いじゃつて」

アクセルは殴りつけるように突撃する  
レモンも銃を構えアクセルを援護する  
シャルはパイルバンカーを構えソウルゲインと拳とパイルバンカー  
がぶつかる

鈴にはソードブレイカーを一機分が襲いかかり

更にレモンは銃を撃つ

鈴とレモンは激しい銃撃戦になる

アクセルはシャルと押し合いになる

「押しが甘いな」

「くつ・・・」

更に力を込め押し返す

「恭介に比べたら押し甘すぎるぞ

それでも義理とはいえ恭介の妹か？」

「－－そ、そうだよ！僕はお兄ちゃんの妹だよ－－！  
だから僕はお兄ちゃんの復讐を止めて見せる－－！」

「甘いな！そんな覚悟では奴は止められん

愚だらん思想が世界のバランスを崩すこれがな－－！」

「でもその思想が世界を作り上げるのも事実！」

僕はその思想が世界を人を変えることが出来る事を知ったの……」

「なら貴様はこの世界をどうしたい！？」この復讐を止めて奴を更なる苦しみに

叩き落とすつもりかあ……それとも世界を変えるとでも言つかああ

！！！！！」

アクセルはシャルを跳ね除ける

「うわああ……」

「シャル！」

鈴はシャルの方を向いた

「余所見は逝けなくてよ」

レモンはソリッドソードブレイカーで一点集中攻撃を行う

「きやあああああ……」

甲龍のシールドエネルギーはひととなつた

「これで終わりだ……これがな」

アクセルはトドメをさそつと手を振り上げるが自分に重なつた影に気つき上空を向くと

「な、何い……」

驚きの声を上げた

そこには蒼い装甲

頭部には黒と青の突起

肩と腕についている緑色の結晶部

羽織った赤色のマント

そして背には巨大な剣

「あ。あれは！－！」

「嘘でしょ！？」

「なぜアレが！？」

「いかん！あれは恭介の元へと向かっている！－！」

「急いで向かうぞ！おそらく奴は戦闘に集中するために通信機のスイッチを切つている！」

「急ぐぞ！－！」

俺達は恭介の元に急いだ  
まさか生きていたのか！？

何故だ！？

アイツの話は何度も恭介から聞いている  
恭介！－生きていたんだ！－

アイツが！－

ラミアが！－！－

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2532x/>

---

IS インフィニット・ストラatos 織斑一夏と千冬の兄  
2011年11月27日17時45分発行